

と き わ ひ が し の ち ょ う  
常盤東ノ町古墳群

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊

1977

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序

京都市は千年の都である。単に千年をかぞえるだけでなく、それ以前の古代と先史の遺跡遺物を埋蔵している。それらの埋蔵文化財を調査、研究するため財団法人 京都市埋蔵文化財研究所を昭和51年(1976)11月1日に発足させた。その研究所が最初に調査の依頼を受けたのは、稲栄織物株式会社の所有地である京都市右京区常盤東ノ町におけるものであって、初めは、仁和寺の子院跡であると予想してトレンチをいれた。しかし、調査が進むにつれて、古墳3基と中世から近世にかけての多数の墳墓を発見した。とくに古墳は7世紀初頭のものとして、当時このあたりを占拠していた秦氏一族のものとして推定し、平安京遷都以前の様相を知ることができる、画期的な成果を挙げるに至った。当研究所は、ここに報告書を作成し、斯界に役立てられる資料として刊行する。

なお、この発掘調査に当り、依頼者の稲栄織物株式会社から、絶大な尽力を得たこと、また、そこに建てられる社屋の工事を請負いされていた株式会社竹中工務店の援助に厚くお礼申し上げる。

また稲栄織物株式会社は、その遺構の一部を、敷地の一部に移築され、その状況を永く保存できる配慮をしていただいた。同会社の埋蔵文化財保存に対する並々ならぬ御配慮があったことを申し述べるものである。

1977年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 杉 山 信 三

## 発刊によせて

古都に生れた誇りは、この優雅な環境の町々を歩くことによって、しみじみと味わうことができます。

古来、歴史の中で、われわれの先祖が日々文化を築きあげた結果が、今日の京都を育んだのでしょう。

この、永年の広範な物事の究明に専念される諸先生達の苦労が、学会を通じてわれわれに知識をうえつけてくださることは、感謝に耐えません。

今度、当社建設予定地が、京都市の周知の遺跡に該当していました。

前述のとおり、日本史の研究に、唯一の文化財を守ることは、日本国民の義務であると存じます。

この土地を発掘していただくことによって微細なりとも貢献することができれば、私一生の誇りと存じます。

幸いにも結果は、本業の織物の先祖と讃えられる秦氏の墓地が発掘され、因縁深く感謝している次第です。

ここに感謝の意をもって生業に専念したいと存じております。

稲栄織物株式会社

代表取締役社長 稲田栄太郎

# 例 言

1. 本書は、調査の結果検出された遺構を第3章におき、1 古墳時代後期古墳 2 中世・近世土壙墓群 3 その他の遺構と分け記述した。
2. 出土した遺物を、第4章におき概説を行い、遺物個々の形態の特徴、成形の特徴、焼成、胎土等の細部については別掲の観察表に記述した。
3. 実測図のレベルは、TPを使用し、47.00mに統一してある。
4. 実測図に示してある方位はすべて磁北を使用している。
5. 遺構の略号については、奈良国立文化財研究所の方法にもとづき、使用している。

例 SB 建物遺構

SD 溝

SK 土壙

6. 遺物表示の際の煩雑さをなくすため、遺物の種類別、出土地点別に略号を用い簡易に記述することにした。略号を以下のように用いる。

1号墳 I

2号墳 II

3号墳 III

弥生土器 E 瓦 K

土師器 H 鉄製品 T

須恵器 S 銅製品 B

陶磁器 C

また同一種類で2個体以上、同一地点から出土した遺物については、アルファベットのあとに数字をつけた。

例 I-S-2 1号墳出土須恵器2番

SK-5H-1 SK5出土土師器1番

7. P1及びP7の地形図(1/2,500、1/30,000、太秦・花園・山ノ内・鳴滝)は、京都市長の承認を得て、調整し使用したものである。

# 目 次

	頁
第1章 調 査	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
第2章 調査地の概況	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第3章 遺 構	8
1 古墳時代の遺構	8
2 中世・近世土墳墓群	18
3 その他の遺構	22
第4章 遺 物	24
1 古墳時代遺物	24
2 中世・近世遺物	26
第5章 結 語	31
あ と が き	32

別表	調査地近郊古墳一覽表……………	33
	中世・近世土壙墓表……………	35
	出土土器表……………	39
	中世・近世土壙墓出土釘表……………	46
	古墳出土金属製品表……………	48
	英文要約……………	49

## 図 版 目 次

PLAN	1	遺構	全体図
	2	遺構	断面図
	3	遺構	1号墳石室実測図
	4	遺構	2号墳石室実測図
	5	遺構	3号墳石室実測図
	6	遺構	墳丘断面図
	7	遺構	石室 (SK1) 実測図
	8	遺構	中世土壙墓 (SK26・46) 実測図
PL.	1	遺構	調査地付近全景
	2	遺構	1 調査地全景 (北西より) 2 調査地全景 (西より)
	3	遺構	1 1号墳石室全景 2 1号墳西北側遺物出土状況 3 1号墳石室内遺物出土状況 4 2号墳石室全景

4	遺構	2号墳石室全景
5	遺構	1 2号墳全景(南東より) 2 3号墳全景(西より)
6	遺構	1 3号墳石室全景 2 3号墳周溝断面
7	遺構	1 中世近世土壙墓群 2 L字状溝(SD7)全景
8	遺構	1 中世墓石室全景(SK1) 2 中世土壙墓全景(SK46) 3 中世土壙墓人骨検出状況(SK26) 4 掘立柱建物全景(SB1)
9	遺物	1号墳出土須恵器
10	遺物	1号墳出土須恵器
11	遺物	2号墳出土須恵器
12	遺物	2号墳出土須恵器
13	遺物	2号墳出土須恵器
14	遺物	2号墳出土土師器(H-23)・3号墳出土須恵器
15	遺物	1号墳・2号墳出土金属器
16	遺物	各古墳出土金属器・中世土師器皿
17	遺物	中世・近世土壙墓出土釘・五輪塔・六道銭
18	遺物	弥生土器
19	遺物	土器(古墳時代2号墳出土)実測図
20	遺物	土器(古墳時代1号墳・3号墳出土)実測図
21	遺物	金属製品(古墳時代)実測図
22	遺物	釘(中世・近世)実測図

## 挿 図 目 次

Fig. 1	発掘調査地位置図	1
2	遺跡分布図	7
3	1号墳周溝断面図	8
4	1号墳遺物散布模式図	10
5	2号墳周溝断面図	12
6	2号墳遺物散布模式図	15
7	3号墳周溝断面図	17
8	中世・近世土壙墓断面図	18
9	中世・近世遺構 (SK5)	19
10	中世・近世遺構図 (SK20)	21
11	SD1・SD6 断面図	22
12	中世・近世全体遺構図	23
13	中世・近世土師器実測図	26
14	瓦へら記号拓本	27
15	銭貨拓本	28
16	五輪塔実測図	29
17	弥生土器実測図	29

## 表 目 次

Tab. 1	土壙墓表	22
2	釘観察表	27
3	銭貨表	28



# 第1章 調査

## 1 調査に至る経過

京都市右京区常盤東ノ町26の5番地に、稲栄織物株式会社の社屋新築工事が行われることになった。同番地は仁和寺子院跡に推定される地域であり、遺跡指定地区になっている。また社屋の構造上、埋蔵文化財が破壊されることは明らかであるため、発掘調査の実施が必要となった。そのため、原因者である稲栄織物株式会社が調査に必要な費用を負担し、発掘調査、資料整理、及び報告書作成を、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

同研究所は、京都市文化観光局文化財保護課の指導のもとにこれを実施した。

発掘調査は昭和51年(1976)10月27日より開始、同年12月6日に終了、以後整理作業に入った。発掘調査中の日程、詳細については後掲の日記抄に記述した。

調査地について略述しておく。延面積1,764.4㎡のうち、発掘調査の対象となったのは建築面積の841.1㎡であるが、実質的な調査面積は935.9㎡である。

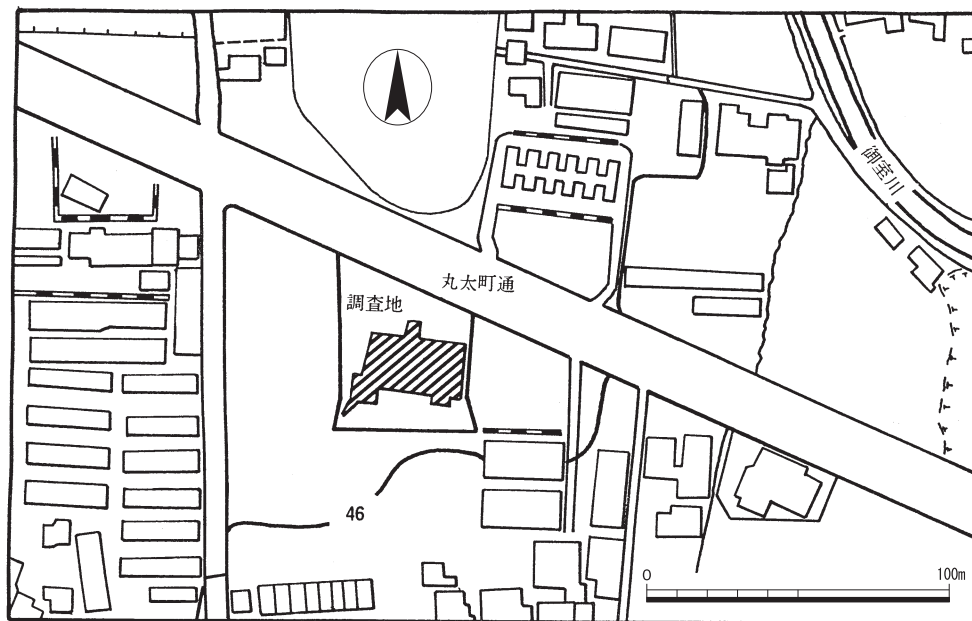


Fig.1 発掘調査地位置図 (1:2,500)

## 2 調査の経過

### 調査日誌

昭和 51 年 (1976) 10 月 27 日～ 12 月 8 日

- 10・27 晴 調査開始。南東隅よりパワーシャベルにて積土層を削除しはじめる。
- 10・28 雨 雨のため作業中止。
- 10・29 晴 積土直下の黒褐色土層が遺構面であることを確認。
- 10・30 晴 パワーシャベルによる掘削の続き。
- 10・31 雨 休日。
- 11・1 晴 精査を開始する。
- 11・2 晴 陶器片にまじり、須恵器、土師器片を検出する。
- 11・3 晴 調査地の南側より東西溝・土壙等の遺構を、西側にて柱穴列 3×1 間分を検出する。また、中央部付近に石組状のものを確認。
- 11・4 晴 前日検出した溝 (SD-1) を掘り下げた結果、底部に近世陶磁器を含んでおり、これ以上古い遺物は検出されなかった。石組みの遺構は南にのび、SD-1 に切られていた。
- 11・5 曇 石組みの遺構が石室であることを確認。また、西隅にも周溝と思われる溝 (SD-2) を検出したため西南隅を拡張した。南北にのび西へ傾く石組みを検出。古墳石室であると推測される。
- 11・6 晴時々曇 北西隅より南東に円を描いてのびる溝を確認。これも周溝であると考えられる (SD-3)。また北東側に土壙群を検出。
- 11・7 晴 土壙群を掘り始める。(土壙群は、ほとんどが中世以降の墓である。)
- 11・8 晴 最初に検出された石室を 1 号墳石室、西南部から検出された石室を 2 号墳石室とし、精査を始める。上部構造は破壊されていてわからないが、下部が 2～3 段残存しているようであった。
- 11・9 晴 1 号墳石室北部より須恵器の壺高杯、杯身、杯蓋などの完形品、鉄器を検出。2 号墳石室からも須恵器、土師器の完形品、金属製の環、鉄器を検出。SD-3 と関連する中央部のマウンドを精査、石室は破壊されていたが掘形を確認。3 号墳とする。
- 11・10 曇のち雨 実測の割り付けを始める。3 号墳を掘り始める。
- 11・11 曇のち雨 3 号墳丘から東部にかけての中世土壙墓の掘り下げ。2 号墳より人骨を検出。残存状態は悪い。
- 11・12 曇 1 号墳の南側に羨道を求めて拡張。土壙墓より人骨を検出 (SK-26)。
- 11・13 曇 土壙墓の精査及び断面実測。

- 11・14 雨 雨のため作業中止。
- 11・15 晴 土壙墓の精査。
- 11・16 晴 3号墳石室部分の床面を出す。石棺の一部と認められる凝灰岩の破片を検出。
- 11・17 晴のち雨 本日までに検出された土壙墓の平板実測を行う。
- 11・19 曇 写真撮影。
- 11・20 曇 1号墳羨道部の全体を出す。
- 11・21 晴時々曇 土壙墓群の実測。
- 11・22 晴時々曇 土壙墓群の調査を終え1・3号墳の周溝検出作業にうつる。
- 11・23 晴 実測を行う。
- 11・24 晴 1号墳周溝を検出。
- 11・25 晴 土壙墓群の下層より鎌倉時代の瓦・土師器皿を含むL字形の溝(SD-7)を検出。
- 11・26 晴 SD-7付近の精査をおえる。
- 発掘調査及び整理作業にたずさわった財団法人京都市埋蔵文化財研究所の構成は以下のとおりである。
- 11・27 晴 3号墳周溝を検出。SK-1は石室をもつ中世土壙墓であった。
- 11・28 晴 全景写真のための清掃。
- 11・29 晴時々曇 全景写真撮影。
- 11・30 晴時々曇 各古墳の部分撮影。
- 12・1 晴 実測に入る。
- 12・2 晴 実測。1号墳の断ち割りを始める。
- 12・3 晴 実測。SK-1の断ち割りを始める。
- 12・4 晴 実測。3号墳の石室床面を断ち割る。
- 12・5 晴 実測。1号墳石室が復元される予定のため、解体移動作業を始める。
- 12・6 晴 実測。
- 12・7 晴 実測及び写真撮影。
- 12・8 晴 調査を終了する。

所長	杉山信三
調査部長	田辺昭三
課長	浪貝 毅
資料部長	木村捷三郎
課長	江谷 寛
総務部長	松井克也
課長	村内義廣
職員	福西 喬 村木節也 吉田悦子 福島京子

## 発掘調査担当者

調査員 百瀬正恒 平田 泰 本弥八郎 吉村正親 堀内明博 木下保明

平尾正幸 鈴木廣司 牛嶋 茂（写真）

補助員 家崎孝治 辻 裕司 和泉田毅 磯部 勝

作業員 小黒満郎 月森六三 西垣 潔 楠 義次 高橋富之助

明石喜三郎 吉田健二 本田 勇 本田憲三 本田敏子

中川一雄 中川重次郎 中川恵美子 牧野 誠 畑中元次郎

調査にあたっては、以下の各氏、各団体に調査・整理のための協力、および有益な助言・指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

機関 竹中工務店 青木組 奈良国立文化財研究所

個人 坪井清足 原口正三 水野正好 毛利俊雄 西田 弘 梶川敏夫

## 整理作業

遺物の水洗、注記、接合、復元など、整理作業については鈴木が専従し、以下の諸君の協力を得た。

黒沢哲郎（立命館大学） 木宮一晃（同志社大学） 中川慶太郎（八代学院大学）

坂口清美（京都産業大学） 足立須磨子 槌矢町子 皆本千佳子

## 遺物観察記録

土器 百瀬、平田、鈴木 金属器・その他 木下、鈴木

## 報告書作成

報告書作成にあたり、編集、立案、最終的な調整は、浪貝、鈴木が主に行い、遺構・遺物等の図面の整理・トレースは、黒沢、伊藤 潔、中川妙子の協力を得た。遺物の写真撮影、構成は牛嶋が行った。校正は小野ひとみが行った。なお、英訳文は浪貝 茂氏に依頼した。

本書各章の文責は以下のとおりである。

第1章 鈴木 第2章 鈴木・百瀬 第3章 1号墳 平田 2号墳 百瀬

3号墳 鈴木 第4章・第5章 鈴木 あとがき 田辺

## 第2章 調査地の概況

### 1 地理的環境

京都盆地北西部を流れる大堰川が、保津峡を抜け嵐山に入る。ここより嵯峨野が、名所、旧跡をみせながら広がり、双ヶ岡丘陵の裾野に至る。双ヶ岡三ノ丘の南を東西に走る丸太町通を西へ行くと、南側に調査地がある。御室川の形成した扇状地性台地にあたり、標高は48mに位置する。最近とみに、この地域の開発が盛んになってきており、調査地の周囲は住宅がたてこんできている。

### 2 歴史的環境

桓武天皇(737～806)が、延暦十三年(794)に山背国に新都を定めて平安京が成立する以前、嵯峨野、太秦から桂川流域が葛野郡といわれていた。

元来、葛野郡は渡来氏族である秦氏の勢力範囲であり、秦氏に関する遺跡の多い所である。また秦氏に関係するものにかぎらず、嵯峨野には多くの文化財が残っている。調査地の周辺だけでも、現存する寺院は以下のとおりである。

御室仁和寺(888) 宇多天皇建立 妙心寺(1337) 花園天皇の寄進により開設。

太秦広隆寺(622) 秦 河勝造立 法金剛院(1130) 鳥羽上皇、御所として建立

すでに廃絶してしまったが、双ヶ岡の北側及び西側にあったとされる寺院跡として、旧仁和寺、仁和寺北院、南院、子院註1などがある。調査地は、このうちの子院跡にあたり、真光院(蓮華心院)の境内に含まれるのではないかと推定される地域である。

同じく廃絶した寺院で、四円寺と称される寺院も、双ヶ岡の北側にあった。すなわち円融寺、円教寺、円乗寺、円宗寺の10世紀末～11世紀にかけて建立された寺院である。また、広隆寺の前身となる蜂岡寺も、調査地の南西にあたる地に推定されている。

寺院だけでなく、古墳も多く残存しており、すでに破壊されたものも含めると、相当数にのぼる。特に調査地の周囲には、前方後円墳が集まっており、秦氏との関連を考えさせられる。

#### 前方後円墳

蛇塚古墳 石室のみ、横穴式石室。

仲野親王陵古墳 全長 75m、不明。

常盤馬塚古墳 全壊。

太秦馬塚古墳 全壊。

清水山古墳 全壊。

天塚古墳 全長 75m、横穴式石室、完存。

#### 円墳

甲塚古墳 径 40m、横穴式石室、完存。

千代の道古墳 径 16m、不明。

五位山古墳 不明。

双ヶ岡一ノ丘古墳 横穴式石室。

双ヶ岡一ノ丘谷古墳群 5基。

双ヶ岡三ノ丘古墳群 13基。

嵯峨野の北西部の古墳群では、御堂ヶ池古墳群 23基、山越古墳群 14基、広沢古墳群 4基、音戸山古墳群 13基、嵯峨七ツ塚 7基、円山古墳、狐塚古墳、稻荷古墳などを加えると、古墳時代後期の古墳がこの地にかに密集していたかが理解できよう。

これら嵯峨野の古墳群は、立地、群の構造などから二群に分けることが可能である。一群は広沢池を中心とする古墳群で、丘陵部に点在する丸山古墳、甲塚、広沢古墳など径 30～50m 級の規模の大きな円墳と、これらの後背山地にある約 100 基の群集墳で構成される。この群の特徴は、丘陵部に規模の大きな円墳があり、横穴式石室の内部主体に石棺を持つものが多い。背後の群集墳は径 10 数 m 前後の円墳で、極めて等質的内容を持つ。これに対し太秦広隆寺を中心とする、ベルト状に巡る前方後円墳を中心とする群がある。この古墳群中には、蛇塚、清水山、天塚、仲野親王陵など有名な前方後円墳が含まれるが、群集墳は含まれないと考えられてきた。しかし、今回調査した常盤東ノ町古墳群のように、前方後円墳の北部には群集墳が平地に形成されていた。それに、この周辺には、かなり多数の古墳があったもようで、畑地に現在も痕跡が残るものもある。したがってこの群は大規模な前方後円墳があること、築造の時期も 6 世紀前半にさかのぼるものがあることなどから嵯峨野地域における中心的古墳群である。

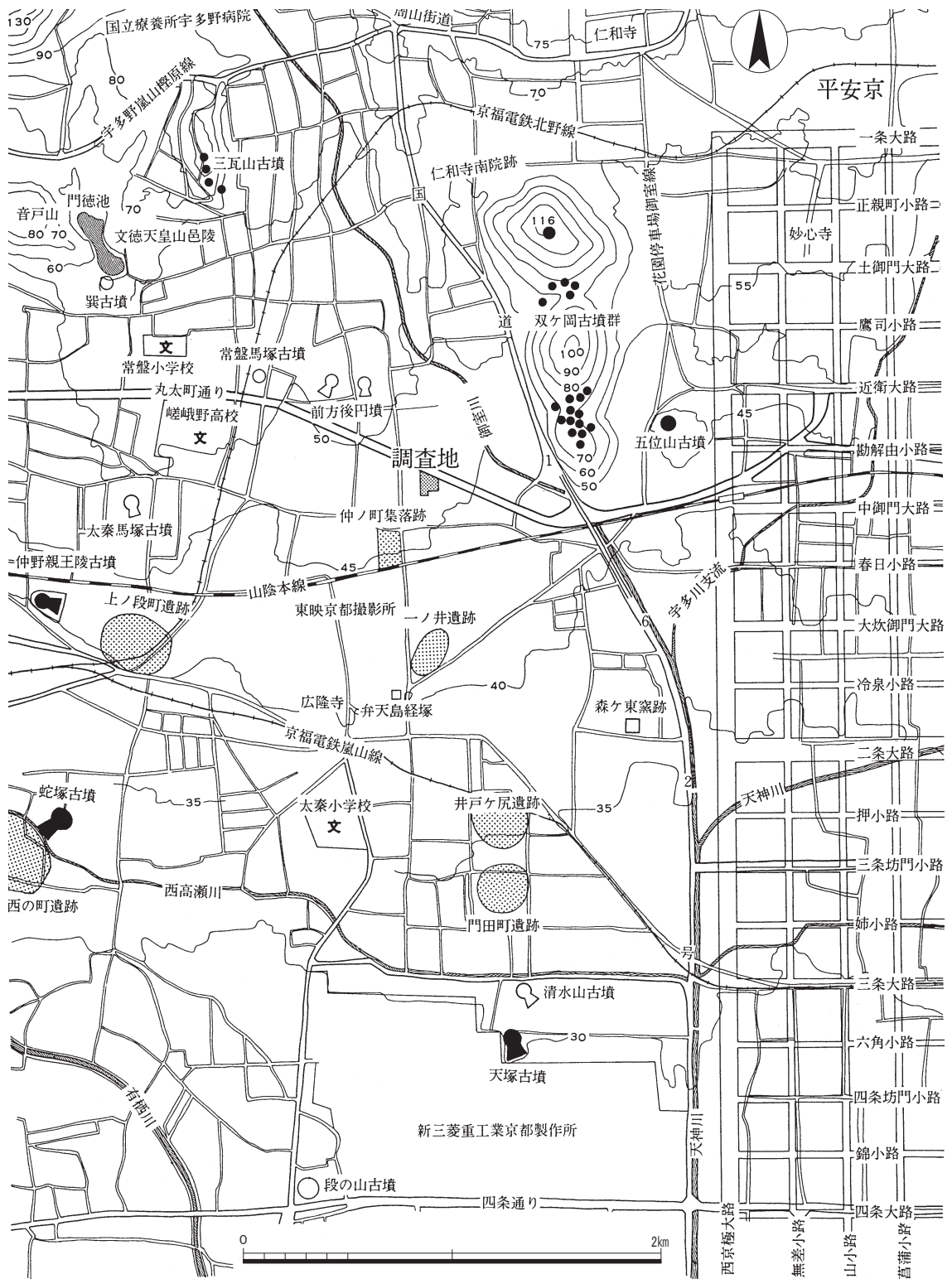


Fig. 2 遺跡分布図 (1:30,000)

# 第3章 遺構

## 1 古墳時代の遺構

古墳時代後期に属する円墳が、3基検出されている。いずれも14～18m級であると推定されるが、1～3号墳とも墳丘部は削平され残っておらず、石室の下端の石組みおよび周溝で確認できたのみである。石室はすべて横穴式石室であり、軸方向は1・3号墳がほぼ磁北～真北の間に向いており、2号墳のみ北西にかなり傾く。石室開口部、羨道部はすべて南側になっている。

### 1号墳

1号墳は調査区東寄り南端で検出された。北西から南東にゆるやかに下る斜面に位置しており、幅1.2m～1.6mの周溝で裾部を画す円墳である。

墳丘自体は大規模な削平を受け、封土の大部分は失われており、築造当時の規模を明らかにでき難い。現状での墳丘規模は、周溝幅の中心部から中心部が東西15m、南北15mであり、北東部では浅く不明確だが、他は明瞭にめぐる。特に北西部で、隣接する3号墳と周溝どうしが切り合い、3号墳によって切られていた。墳丘高は不明である。

その他、墳丘上の外部施設として顕著なものは認められないが、墳丘南端に径15～20cmの小ピットがいくつか認められた。封土を形成している黒褐色土は直接整地層下に

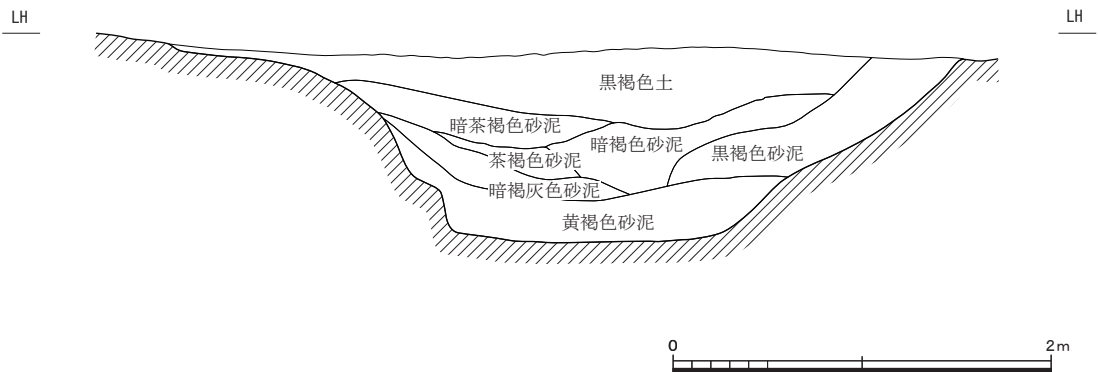


Fig. 3 1号墳周溝断面図(1:40)



接しており、墳丘頂付近で40cm、その下層の黒灰色土は20cmの堆積をみせる。墳丘裾部に残存している茶褐色土は、当初、黒褐色土の上層全体に盛られていたと考えられるが、後世の削平にあい裾部付近にのみ残り、他は消失したと思われる。

### 石室部構造

石室構築のための掘形は、地山と考えられる黄褐色泥砂層を、北側で深さ40cm、南側で深さ約10cm削り取り、石室構築に必要な土壌を造っている。しかし地山上の黒褐色土、さらにその上層の黒色土にも切り込みがみられることと、掘形内の埋土中にも地山である黄褐色泥砂が混入していることから、石室構築に先立って、地山上に前述2層の約40cm～50cmの盛土を行い、ある程度墳丘を整形した後、石室構築のために掘り窪めたものと考えられる。掘形平面の規模は南北約8.4m、東西約3mであるが、南側でややすぼまり気味である。

石室の構造は横穴式石室をもっており、玄室の主軸は真北に対しN6°Wでやや西北を指し、羨道部は南向きの入口を持つ。奥壁から羨門までは3.6mであるが、玄室部と羨道部の境界あたりがSD1(近代溝)によって切られているため、正確な玄室長、羨道長及び袖形式は不明である。幅は羨道部約1m、玄室については中央部がややふくらみ気味で、奥壁付近1.5m、玄室中央1.6mの規模を持つ。

石室上部は後世の削平によって破壊を受け、天井石と側壁の大部分が削り取られ、石積み自体は二段、一部で三段しか残存していない。したがって石室高、羨道高共に不明である。使用されている石材は一様に約30×40cm大の赤っぽくややもろい角張った自然石で、比較的持ち運びに容易と思える大きさのものである。しかし最下段の石材には約40～50cmのものがしっかりと基底面にすえられており、二段目以上の石材との差を感じさせる。石積みにあたって隙間を小石で充填していることや、安定を計るための小石を詰めている以外に、特別な裏込めの粘土や礫などの使用はなされていない。

石室床面は、玄室に限って川原石、自然石混合の小礫が敷かれ、敷石面を構成しているが、羨道部には敷石は認められない。石室内に堆積する埋土は4層に分けられ、このうち黒灰色泥砂、暗灰褐色砂泥、暗灰褐色土は、各層中に石室側壁の石材や小礫を含んでおり、後世の攪乱で石室内に落ち込んだものと推定されるが、敷石とほぼ同じレベルの灰褐色土は古墳築造時の埋土と考えられる。

特殊な埋葬施設としては、奥壁から約0.5mと約1.7mの位置に玄室を三分する形で並置された石列がみられる。第1列、第2列共に石材は30cm大で、各列5個が並び、中央の

石のみややレベルが高く、他4個は水平にそろえてある。棺台と推定されるが、棺の痕跡は確認できていない。

他に石室閉塞のためと考えられる石材が、羨門付近から南側を頂点に三角形に置かれているが、一段のみでそれ以上は削平時に失われたのであろう。

**遺物** 鉄鏃を除く杯身 (S-2・S-4)、杯蓋 (S-1・S-3)、高杯 (S-5)、直口壺 (S-11)、脚付長頸壺 (S-10) は、玄室奥壁のやや西寄り隅の敷石直上で検出された。人骨はすべて西側壁下、奥壁から玄門付近にかけてほぼ一体分が検出されているが、東側壁下ではまったく検出されていない。鉄鏃 (T-1～T-4) は、奥壁近く東側壁付近に散乱した状態で4本出土している。他に杯身 (S-6) が、玄室中央西寄りの敷石面よりやや浮いた状態で一個体。玄門西寄りで直口壺 (S-8) 一個体、杯身 (S-14) が落石で破砕された形状で一個体。さらに羨道中央東寄りで杯身 (S-9) が検出されており、いずれも敷石直上か基底面上である。その他、墳丘上東南付近で宝珠形つまみ杯蓋が出土している。また墳丘を形成している封土中に、数多の弥生土器片が含まれており、近隣に弥生時代遺跡の存在を暗示しており興味深い。

**小結** 1号墳は石室内に棺台と思われる施設を持つが、鉄釘及び棺材の痕跡はまったく認められなかった。遺物は鉄鏃が散乱した形跡を示すが、他の遺物はおおむね奥壁西寄り、玄室西寄り付近にまとまっていた。特に杯身と杯蓋各二個体は、やや蓋をずらせた形状のセットで出土し、移動した形跡が認められな

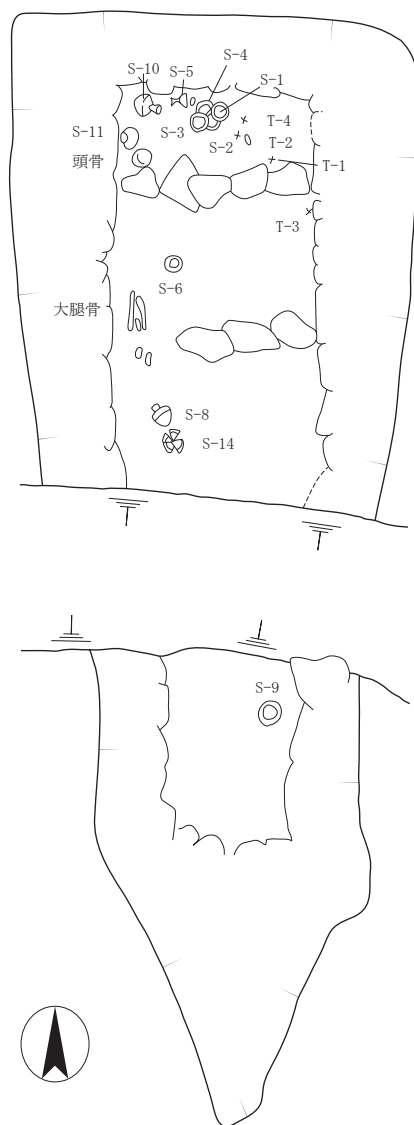


Fig. 4 1号墳遺物散布模式図

いこと、及び石室内遺物はすべて敷石直上、基底面直上で検出されたことなどから、たとえ追葬が行われたとしても第1回の埋葬時から長時間を経たものとは考えにくい。さらに、東側壁付近からは土器はまったく検出されず、人骨も西側壁下のみに集中し、それも一体分で二体分とは考えにくく、寄せ集められた痕跡も見あたらない。あえて推定が許されるなら、前述の棺台は二体分の棺を収容できる形態を示していることから、当初、二体の埋葬を予定していたが、何らかの理由によって中止し、それ以後も追葬は行われなかったと考えられる。

墓道については、1・3号墳はほぼ南向きに開口し、2号墳が東南に開口していること、3号墳の西北に別の古墳の周溝とマウンドと思われるものを確認していることなどから、まず、1号墳の南を東西に通じ、2号墳と3号墳の間を西北に抜けていくルートが推定される。しかし、1号墳の南については調査区外であり、また、2・3号墳の間にも墓道を明確には検出できなかった。

## 2号墳

発掘調査地の西南隅付近で、掘立柱建物の掘形が数個検出された。そのため建物規模を把握する目的で、トレンチの拡張作業を行った。拡張部分には以前の養鶏場に伴うコンクリートの叩きがあり、重機を使い廃土作業を行った。この廃土作業中、コンクリートの真下で石材数個が発見された。発見当初は石材の性格をつかみかねたが、石材が1号墳と同様の褐色のチャートであること、南北方向の細長い掘形や石の並びを検出したため、横穴式石室と断定し調査を行った。

調査地が削平されており、地表下60cmで石室の石敷床面を確認したことから、石室最下段が残っている所は、奥壁付近の東西両側壁だけで、他の部分は残っていない。石室内への石材の落ち込みも多くはなかった。これは、耕作の過程で、墳丘の削平が行われ、石材が移動されたものと考えられる。近くに住んでおられる前の土地所有者によると、「畑にする前はやぶであったが、高く盛りあがっていたかどうかは記憶がない」とのことであった。現在も付近の畑の境界には、石室の石材と思われるチャートがころがっている。地形は、この2号墳が位置する地点が最も高く、東に向かうにしたがって下がっていく。これは発掘調査の地山面と一致する。

2号墳は調査地の西北隅で検出されたため、墳丘の西部と南部は調査対象地域外になり、

墳丘規模を確定するための有効なトレンチを設定できなかったが、石室の東部で周溝を確認できたため、ある程度の復元は行えた。

横穴式石室の掘形を検出後、墳丘規模を知るため、幅1m、長さ6mのトレンチを石室の西部に、石室主軸に直行する形で入れた。このトレンチで石室側から南西方向に下る層を確認したが、この層中には伏見人形、近世陶磁器などが含まれ、近世の攪乱によるものと判断した。したがって周溝を確認できたのは石室の北部から東部にかけてのみであった。特に北部では周溝の残りがよく幅1.0～1.3m、深さ0.7mで約7m検出した。しかし東部に至るにつれて溝の掘り込みがはっきりしなくなり、弥生時代の遺物包含層である黒色土層の下がりが見られるだけであった。検出した周溝は円形に石室の周りをめぐるのであり、円墳と判断した。周溝が一部分しか検出できなかったため、正確な墳丘規模は不明であるが、石室が円墳の中央部に存在すると仮定して、ここから検出した周溝までの距離を測り、折りかえせば約14～15mの円墳になる。

**石室部構造** 石室の残りは前述したようによくなかった。比較的残っていた所は、玄室奥壁周辺の東西両側壁で、最下段の石と、一部で二段目の石が残っていた。この部分は床面の石敷きも良好な形で残る。これに対し、横穴式石室入り口周辺は側壁の石材や床面の敷石もなく、同一レベルでビニール袋が検出される状態であった。石室を構築するために、まず東西3.1m、南北8.5mの南側がやや狭くなる長方形の掘形を造る。掘形は弥生時代遺物包含層の黒色土と、地山の黄褐色砂礫層を掘り込んでいる。次に最下段の石を据えつける。この最下段の石と掘形との間に地山の黄褐色粘土をつめ、かたく叩きしめる。この裏込め作業は、最下段の石の上面が平坦でない場合にも、ここに土をつめ第二石目が乗りや

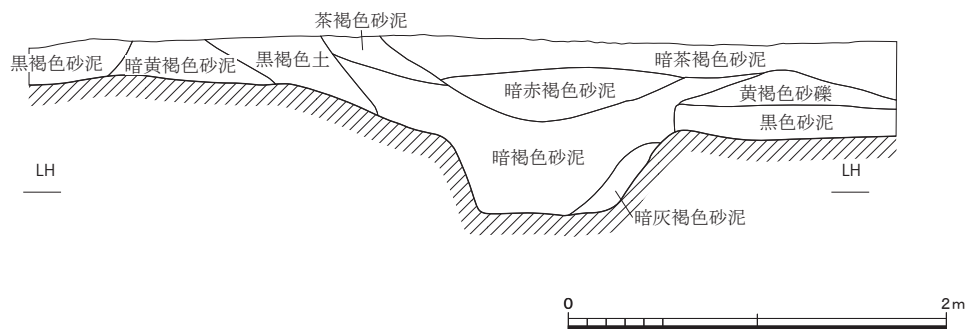


Fig. 5 2号墳周溝断面図(1:40)

すいようになっている。裏込め土の叩きしめは、最下段は丁寧に行うが、第二石目からは顕著ではない。石は40～60cm角の、付近で産出する褐色のチャートで、長辺を横にして使っている。床面の敷石は径10cm前後の川原石を敷きつめている。玄室奥壁部分の西北隅に石材が残るのみで、他の石は抜き取られていたが、床面の敷石が残り、奥壁の位置を推定することができた。この奥壁から西側側壁は3.6mまでと東壁が2.8mまで残り、床面の敷石が奥壁から5mまで残っていた。石室掘形は、北端で東西幅3.1m、南端では2.6m、南北方向に約8.4mと計測できた。これらのことから幅1.7m、長さ8m前後の石室であったと考えられる。この石室の袖石の有無をつきとめることはできなかったが、後でのべるように無袖式と考えた方が良いと思われる。

**石室内遺物出土状態** 石室は大きく破壊されていたが、多量の遺物が完形品で出土した。出土遺物の中には、S-14の広口壺のようにガラス・ビニール袋などと共に破片で出土する例もあったが、他は現位置と思われる出土状態であった。出土位置は石室の中央部と玄室奥壁部の2箇所集中して検出された。この2号墳出土の遺物は須恵器壺6・高杯2・杯身8・杯蓋8、土師器甕1・椀1、銀環2、金環1、刀子3、鉄鏃3、釘状鉄器4、人骨片であった。

**玄室奥壁部出土遺物** 奥壁は西北隅の石材が遺存していたのみで、他の石は抜き取られて存在しなかったが、検出された遺物は、杯身(S-12)が転落した石で割れて出土した以外は、完形で出土した。この部分は敷石もよく残り、床面の攪乱はなかった。奥壁の西に土師器甕(H-23)が口を下にして出土し、この東には大形広口壺(S-20)が口縁を西に向けた状態で、さらに脚部を打ち欠いた脚付長頸壺(S-19)が口を南東に向けて出土した。また奥壁北東隅に小形直口壺(S-18)が敷石をはずし落とし込まれた状態で、広口壺(S-21)はこの南40cmで横向きで出土した。須恵器杯・杯蓋はこれら壺類にかこまれるように出土した。割れて出土した杯身以外は、口を上にして置かれていた。須恵器の出土状態で注目されるのは、奥壁北西隅から50cm南の地点に、20cm角の平坦な石を敷石上に置き、この上から須恵器杯蓋2個(S-5・S-9)が伏せた状態で出土したことである。この石と西壁との間からは、長さ3～4cmの釘状鉄器(T-13～T-16)が4本一列に並び、直立して出土した。この釘状鉄器は先端も後端も折れて形状は不明である。木棺の底板をとめる釘かと考え付近を精査したが、この4本以外には出土しなかった。この他の鉄鏃(T-6～T-8)、刀子(T-9・T-10)等はばらばらな状態で土器群の南側から出土した。銀環2(B-1・B-2)、金環1(B-3)は奥壁の中央部土器群の南部から出土した。

**石室中央部出土遺物** 玄室奥壁から約5m南の石室中央部からも多数の遺物が出土した。この地点は床面の敷石が抜き取られ、東西両壁面の石材も一つもない状態であった。遺物は杯身が破片で出土したが、他は完形品であった。奥壁出土遺物群と大きく異なるのは、金属器類が一点も出土しなかったことである。この部分からは杯身5個、杯蓋4個、高杯1個、長頸壺1個、土師器1個が出土した。高杯(S-15)と長頸壺(S-17)は口を奥壁に向けて横倒しで出土し、この西南部からは杯身が小破片となって出土した。高杯、壺の出土地点から奥壁寄りでは杯類が完形で出土し、杯身と杯蓋(S-1・S-2)は並んで共に口を上置きに置かれていた。これらの須恵器杯類の東部には小破片になった土師器椀(H-22)が点在して出土した。また、奥壁から2.8m地点の西壁下で、須恵器杯蓋と杯身、各々2個ずつが重なって出土した(S-3・4・7・8)ことは注目される。

**人骨の出土状態と追葬** 人骨は2箇所から出土したが、奥壁出土遺物群と石室中央部出土遺物群にかこまれる範囲内からの出土である。奥壁西部の石の上に乗った2個の杯蓋出土地点から約70cm南で、歯の骨が数個出土した。歯以外の骨はみあたらず、顎からはずれたような状態であった。この骨の南50cm西壁寄りからは手、足の骨が10数本折り重なって出土した。この骨の中には歯の骨も含まれるが点数は少ない。この手足の骨は石室内で白骨化したのを再葬時に片付けたものと考えられる。これら手足の骨の南側にも歯、手足の骨などが出土した。それらはいずれも石室の主軸方向を向いていた。

遺物、人骨などの出土状態から石室の利用は2回にわたると考えられる。出土遺物の形式編年からいっても奥壁出土遺物群が古く、石室中央部出土遺物群が新しい傾向を持つ。S-12・13などの杯身はたちあがり鋭く底部もヘラケズリが行われ、平底であるのに対し、S-1・2などの石室中央部出土の遺物は器高がやや高くなるが、口径が小さくなり、たちあがりもシャープさがなくなっている。底部も調整しないものがあり、三角形に近い形になるものもある。また、高杯は各群に一団体ずつ出土し、この点からも二時期<sup>註3</sup>にわたる石室の利用、埋葬があったと考えられる<sup>註4</sup>。

**小結** 2号墳は石室主軸が磁北からN35°W方向の推定直径14～15mの円墳である。周辺地形は北西方向から南東方向に向けてなだらかに下がっている。この古墳が西南隅で検出されたこともあり、他の1・3号墳に比べ高い所に位置している。これは発掘の結果からも地山が東に行くにしたがって下がる傾向が検出され、高所に築造されたことがうかがえる。周溝は北部から東部にかけて検出したが、東部から南部にかけては巡らないようである。これは地形が南東方向に下がることと無関係ではないだろう<sup>註5</sup>。石室の構造は東西幅

3m 前後の掘形を長さ 8.5m 掘り、最下段の石を据えている。この石室が有袖式か無袖式か解決することはできなかったが、次のことから無袖式と推定した。

嵯峨野の群集墳の中で群構造がわかり、調査が行われ、石室構造規模がわかる古墳群は少ない。ここでは御堂ヶ池古墳群をとりあげ、石室規模と構造の関連についてみる。この古墳群は総数 23 基の円墳で構成されているが、石室構造のわかるのは 1・6・11・12・13・14・15・17・20 号の 9 基で、この内 1・6・11・13・14・17 号墳の 6 基が有袖式で、他は無袖式である。有袖式の玄室長は 1 号墳の 3.7m のものを最大とし、11 号墳の 2.2m を最小とする。常盤東ノ町 2 号墳は奥壁から西側壁が 3.6m 残っており、この間に袖石はない。したがって御堂ヶ池古墳群例からすれば、2 号墳は無袖式古墳と考えられる。嵯峨野の古墳で無袖式の石室を持つものは、この御堂ヶ池古墳以外に、苔寺 23・26 号墳、上

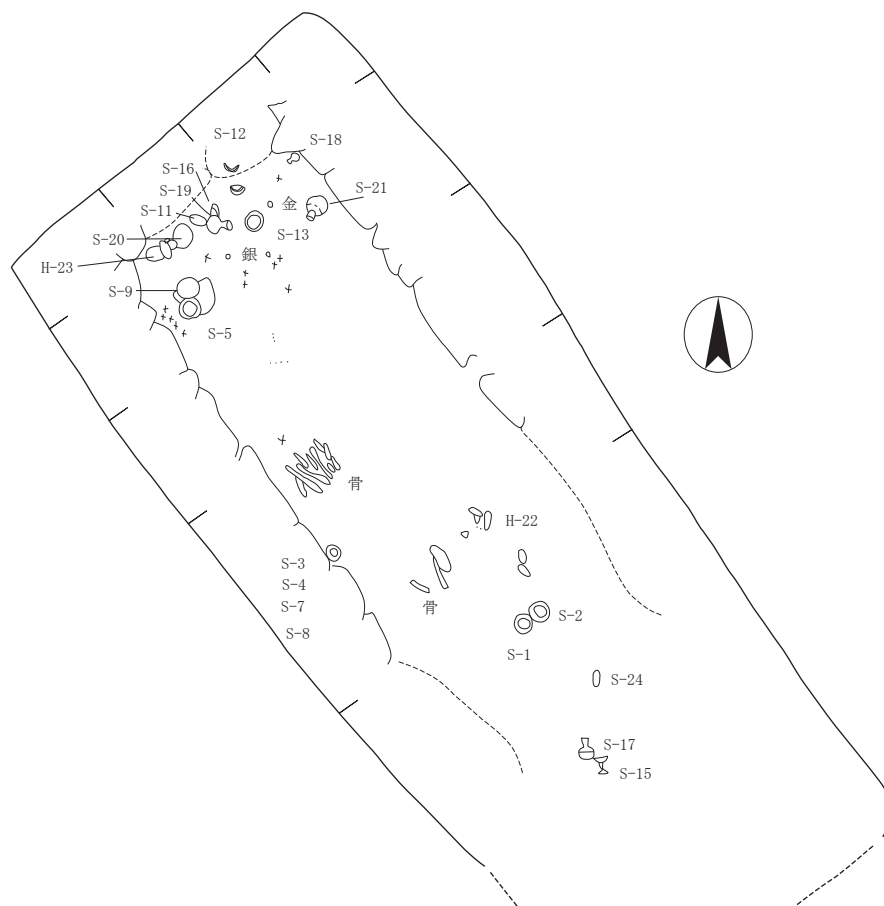


Fig. 6 2号墳遺物散布模式図

園尾 2 号墳、北松尾 1・2・3・4 号墳、広沢古墳、天塚古墳北石室<sup>註7</sup>などがある。このうち御堂ヶ池 12・15・20 号墳、苔寺 23・26 号墳、上園尾 2 号墳、北松尾 1・2・3・4 号墳は丘陵上ないし、丘陵裾にある後期の小円墳である。これに対し広沢古墳、天塚古墳は平地<sup>註8</sup>の古墳で、前者は 12m の石室を持つ径 30m の円墳であり、後者は 73m の前方後円墳である。今回調査した常盤東ノ町 1・2 号墳が無袖式の石室を持つことは、これら平地の大古墳との結びつきが考えられる。2 号墳は出土遺物も多数残っていたが、これは墳丘の破壊が盗掘に伴うものでないことによると思われる、死者に供えた器物のセットの復元も可能であった。また高杯 1 個、壺 2～3 個、杯のセット 3～4、鉄鏃、刀子などが 1 回の埋葬に使用された器物のセットであったと考えられる。

また、2 号墳は建設予定地から外れていたことも幸いし、事業主（稲栄織物株式会社）の文化財に対する好意と相まって盛土のうえ現状保存されることになった。なお 1 号墳は破壊をまぬがれ得なかったが、復元され、丸太町に面した同社の駐車場の一角に、検出された状態でおかれている。

最後に、調査中多数の人が見学に訪れ、我々の知らない古い周辺地形など有益な教示をいただいた。しかし土器が数個、心ない人によって持ちさられたことは残念であった。

### 3 号墳

3 号墳は調査区中央の、やや西寄り北側で検出された。墳丘の径は、ほぼ 18～20m で今回の調査の中では最大である。もとより封土は削平されており、墳丘高、上部構造ともに知るすべもないが、検出面から観察した墳丘構造は、南部では石室部東端まで、地山を利用しており、掘り下げて石室を構築している。また石室東端より東側周溝にかけて黒褐色土の盛土を行っている。

周溝も最大であり、幅 3m、深さ 1m におよぶ部分もある。また、羨道部延長線上でゆるやかに底部があがり不明確になるが、他は明確に形成されている。

**石室部構造** 石室部分の掘形は、南北約 10m、東西最大幅 4m である。深さは、北側で 10cm、南側になると 1～3cm となっており、基底部のみを検出したと考えられる。石室部は、横穴式石室であるが、ほぼ全体に破壊を受けており、さらに土壌状の掘り込みで攪乱されて、石室石組みの最下段、敷石等も残存せず、その規模、構造等については不明である。軸方向は真北に対し  $N1^{\circ}E$  と考えられる。また 3 号墳は、玄室に推定される部分より、凝灰岩<sup>註9</sup>で造られた石棺の一部が検出されている。羨道部は、封土と明瞭に異なった粗砂混



じりの黄褐色砂泥が敷かれており玄室開口部より 5m におよぶ。しかし、これ以外の構造は不明である。

**遺物** 石室が破壊されており残る遺物は、土器類では須恵器の宝珠つまみ付蓋 (S-1)、杯蓋 (S-8) のみであり、他の土器は石室の付近、あるいは周溝から検出されているものである。金属製品は、鋳状の金具 (T-11) と皮吊金具 (T-12) と考えられるものが、石室北東部の攪乱墳から検出されており、破壊を受けた際まぎれ込んだものであろう。

**小結** 記述してきたとおり破壊が大きく、観察できた部分はわずかである。石棺を持つと考えられるが形態を推定するにも足りない破片ばかりである。嵯峨野の古墳群からも石棺出土の例はいくつかあり、ほとんどが同群中では古い部類に属する。盗掘などで古い遺物が持ち去られていたならばともかく、3号墳から出土する土器は7世紀前半であり、それ以前のもの出土していないため、この時期の古墳としている。しかし、長い年月で数

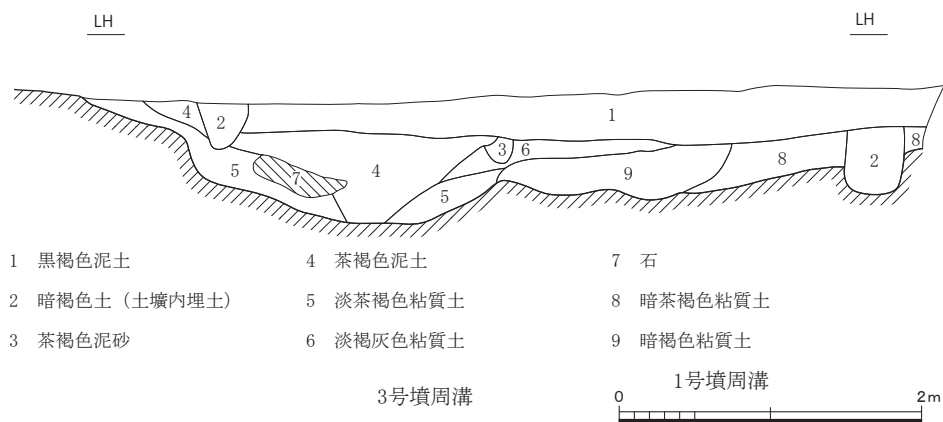


Fig. 7 3号墳周溝断面図(1:50)

次にわたる追葬の例もあり、古墳の築造の時期を安易には決めがたい。

## 2 中世・近世土壌墓群

中世から近世の土壌墓が、42基検出されている。この土壌墓群からは、火葬墓の例が1基もみつかっておらず、すべて土葬である。土壌墓の大部分は、調査地の北東に集中しており、他は特別な例に入れられる。集中する場所は、3号墳の墳丘東側、周溝埋土上から調査地の東端に至る南北15m、東西20mの地域である。土壌墓の成立する面は3層に分けることができる。層序を上面から第1層、第2層、第3層と名付け、各層の解説をしておく。

**第1層** 黒褐色土。腐植土であり、粘質が少なく砂をかなり含有する。近世陶磁器、土師器片等を含む。江戸時代中頃の整地層であると考えられる。

**第2層** 黒褐色泥砂。色調は第1層に似るが、やや粘質が強くなっている。土壌の多くがこの層から検出される。中世陶磁器、土師器片などを含む。鎌倉時代終わり頃まではさかのぼれる。

**第3層** 暗茶褐色泥土。古墳の封土を削平、整地したものと考えられる。地山の黄灰色砂礫を混入し、やや粘質の強い土である。層内に中世陶磁器、須恵器、土師器片などを含む。鎌倉時代始め頃には整地されていたと考えられる。

**SK1** 3号墳の南、周溝の途切れる所に位置し、南北2.6m、東西1.95mの長方形掘形の内に1.75m×0.75mの石室を持つ。掘形内の堆積状態は上層、下層に分けられ、上層は近世の陶磁器、椀瓦を含む黒褐色土であった。上層を取り除くと石室の一部が現れた。石室の内部に堆積した暗茶褐色泥砂を下層とする。下層内には、須恵器、土師器片、平安時代

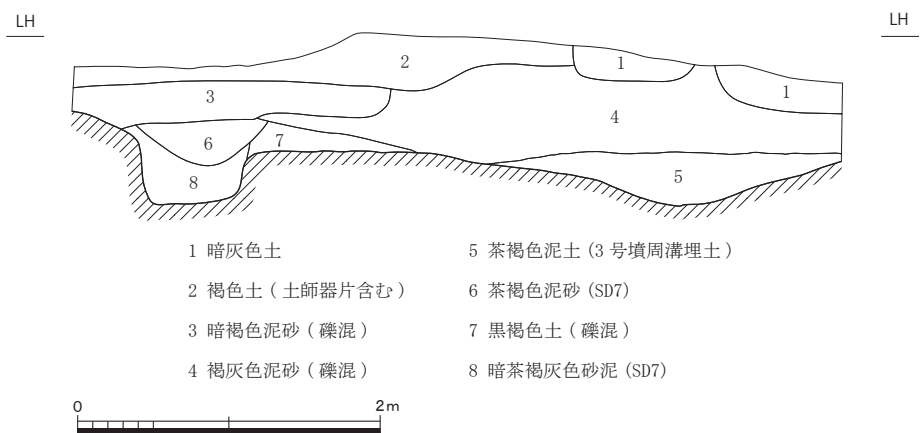


Fig. 8 中世・近世土壌墓断面図(1:50)

後期の瓦片などが含まれる。石室内の精査の結果、上部構造はまったく残っておらず不明であるが、壁面については2～3段、高さ40cmほど残存するが、北西隅は破壊されていた。底部は、大きな礫で面をそろえた敷石がほぼ完全に残っており、瓦、軒平瓦、須恵器片等が材料の一部として使用されていた。石室内には、木棺がおさめられていたと考えられ、敷石上に残った釘の位置で、長さ1.6m、幅0.55mの寝棺と推定できた。副葬品はまったくなく、骨の残存もなかった。石室の構築に作られた石材は60cm×40cmをこえる大きなものもあり、双ヶ岡近辺より産出するチャート質のものが多く、少数ではあるが砂岩も認められた。築造された時期は、敷石内の遺物、層序からみても、鎌倉時代をさかのぼれない。<sup>註10</sup>

**SK5** 3号墳西側周溝の埋土上に位置し、南北2.9m、東西1.7mの掘形を持つ。掘形内の堆積は黒褐色土と黄褐色泥砂の混入した土層で、一時に埋められたとみられる。層内は、土師器と須恵器片を含んでいた。特に土師器皿は、完形品が土壌の上部北側に集中していた。底部からは釘が検出されたが、棺の形が推定できるほどではなかった。埋葬の時期としては鎌倉時代初期まではさかのぼれる。

**SK7** 南北1.0m、東西0.6mの長方形の掘形をもつ。第2層に属する一つである。棺の各隅に打たれた釘のみでなく、底板をとめた釘も残存しており、部分的に認められる板の痕跡とともに、棺の形状を知ることができた。状態は良くないが人骨が残っており、頭を北向きに埋葬されていた。副葬品には、麻布状のものに包まれていた痕跡のある六道銭と、ほとんど腐食し皮膜のみになった漆器が認められた。

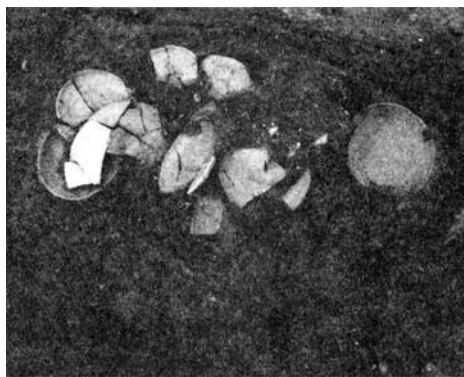


Fig.9 中世・近世遺構 (SK5)

**SK8** 1m×1mの方形。掘形内の土の硬さの違いで棺の内外を区別することができた。釘は掘形に堆積する土の上の方でも確認しており、方形の座棺であると思われる。頭骨の一部のみ残存していた。

**SK11** 南北1.4m、東西0.8mの長方形。第2層に属する。木棺が掘形いっぱいに収められており、釘が各隅に残っていた。頭骨と上腕骨の一部が残っており、頭を北向きに埋葬されている。棺内より六道銭と土師器皿を検出している。

**SK12** 南北1.0m、東西0.8mの長方形。第1層に属する。釘が動いていると考えられ

るため棺の形はわからない。骨も残っていなかった。

**SK16** 南北 1.2m、東西 1.3m の方形。第 2 層に属する。掘形内において棺の内外で土の色と硬さはっきりした相違をみせる。棺の外は硬い茶褐色砂質土と黒褐色土の混入した土であり、内は茶褐色土でしまりがなかった。底部に釘が残っており棺の形が推測でき、およそ 1m 強の方形の座棺であると思われる。棺内には頭を北において、くずれるように人骨が収まっていた。被葬者は立派な体格を有していたと思われ、骨は太く大きく残りも良かった。副葬品はなかった。

**SK18** 南北 1.3m、東西 1.0m の長方形。第 2 層に属する。掘形内からは歯と大腿骨の一部が検出されたが、釘はなかった。棺の痕跡もなく、直葬されたのではないかと考えられる。土壌内からは、土師器片が検出されているが副葬されたものとは考えられない。

**SK20** 1m × 1m の方形の掘形をもち第 2 層に属する。棺の内外の土の差が明瞭である。特に棺内は黒褐色土であり、一部に空洞すらあった。棺の大きさは釘の位置からすると 70cm × 50cm の長方形の座棺であると思われる。人骨は、ほぼ完全な形で残っており、頭を北向きに埋葬されていた。副葬品として六道銭と漆器の表皮膜が検出された。

**SK26** 南北 0.55m、東西 1.6m の長方形であり SD6 を切って検出された。掘形いっぱいには棺が収められており、頭を西において、ほぼ完全な形で人骨が確認できた。寝棺であり、脚の部分が少々曲げられた程度で埋葬されていた。副葬品はまったくない。

**SK45** 南北 0.5m、東西 0.7m の長方形。第 2 層に属する。1 号墳石室の北側の掘形に一部切り込んでいた。掘形内の土は、1 号墳の封土と同じで、土の硬さと、しまり具合の差で埋土を確認できた。掘形いっぱいには棺が収められており、座棺であると考えられる。人骨の残りは良好であったが、屈んだ状態であったのがくずれおちたとみえ、埋葬された当時の位置を保っていない。副葬品としてワラを孔に通した六道銭と、漆器の表皮膜が検出された。

**SK46** 南北 1.8m、東西 1.0m の長方形の掘形をもつ。3 号墳南西の周溝が途切れる部分で検出された。埋土は茶褐色砂泥と黒褐色泥土の混合土で一気に埋められており、他の土壌とやや異なった様相を示す。立地が 2・3 号墳の墳丘から離れるため、古墳封土の黒褐色土の混入が少ないものと考えられる。釘の位置から棺の大きさを推定すると、1.4m × 0.6m ほどであろう。棺内には骨はほとんど残っておらず、歯が少々北側に散乱していたのみであった。副葬品として、土師器皿、口径 15cm のものが 1 枚、10cm のものが 4 枚、北西隅に埋納されていた。土師器皿から推定される埋葬の時期は鎌倉時代始め頃までは

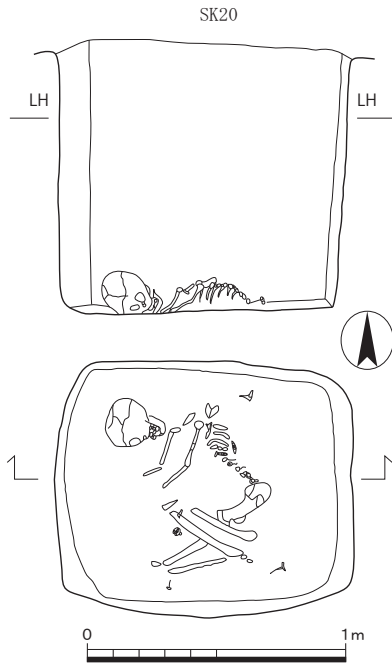


Fig. 10 中世・近世遺構図 (SK20) (1:30)

と考えられる。骨の残る土壌もなかった。

第2層の土壌墓群は、SD7を埋めたうえで構築されている。土壌の掘形も、ほぼ1mの方形と、1m×0.6m前後の長方形が大部分をしめる。副葬品を持つものは、六道銭と漆器を持つSK7・11・20・45・48があるが、少なくなってきた。なお、棺に納めず、直葬されている墓壇も、この頃から多くなっている。

第3層の土壌墓群は、SD7に区切られた北東部の外に点在する。SD7と平行すると考えている。

以上3期にわたる区別をつく土壌墓が検出されたわけである。しかも、この墓域は古墳の墳丘、及び墳丘間に設けられており、墓地として長年使用されていたことになる。

他の遺構としても、SB1とした2列の柱穴しかなく、明らかに第1層の墓群が終末をむかえ、忘れさられるまで不可侵域として保たれてきたのであろう。

さかのぼれる。

**SK47・48** SK47は南北1.1m、東西0.5mの長方形。第1層に属する。木棺の痕跡はなく、直葬されていたと考えられる。副葬品はなかった。SK48は、SK47に北半分を切りとられており、SK47を底部まで掘りきった後、輪郭を確認することができた。南北ほぼ1m、東西0.6mで第2層に属する。底部に釘が残っており、棺は0.7m×0.5mの座棺と考えられる。人骨が残っており、頭を北において埋葬されているのが確認できた。副葬品は、六道銭が麻布に包まれ、ひもでしばった状態で竹製の容器に入れられていたのを検出した。

**小結** 第1層の土壌墓群は、副葬品もたず、棺にさえ収められていなかった

第1層	SK15 36 37 47 50 56 57
第2層	SK7 8 9 10 11 12 13 14 16 18 20 26 27 28 29 34 38 40 41 43 45 48 49 51 52 53 55 58
第3層	SK1 5 46

Tab.1 土壙墓表

### 3 その他の遺構

#### 溝

**SD1** 1号墳周溝及び石室を東西に切る。地山まで切りこみ、幅1.2m、最深部で0.8mほどである。底部から近世～近代の染付が検出されており、かなり新しい時代のもと考えられる。水の流れた痕跡はない。

**SD6** 調査地の東端にあり、幅1m、最深部0.5mほどの溝である。SK26・41が埋土中に掘り込まれているが、遺物がまったく検出されないため、時期、性格は不明である。

**SD7** 調査地の北東部にあり、幅1m、深さ0.7mでL字状をなす。平安時代後期から鎌倉時代の瓦、土師器皿が溝いっぱい投げ込まれていた。SD7も水の流れた痕跡はない。

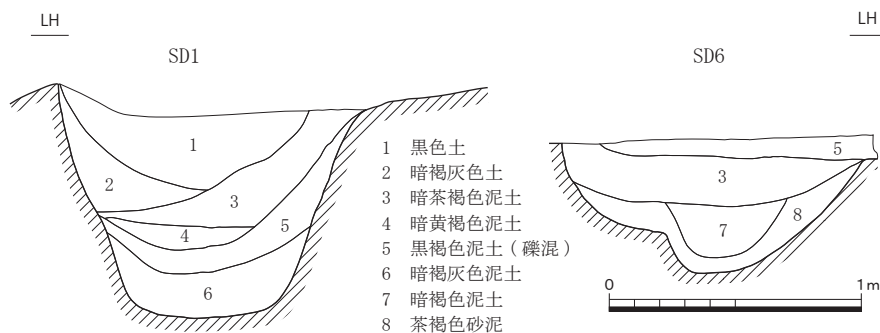


Fig.11 SD1・SD6断面図(1:30)

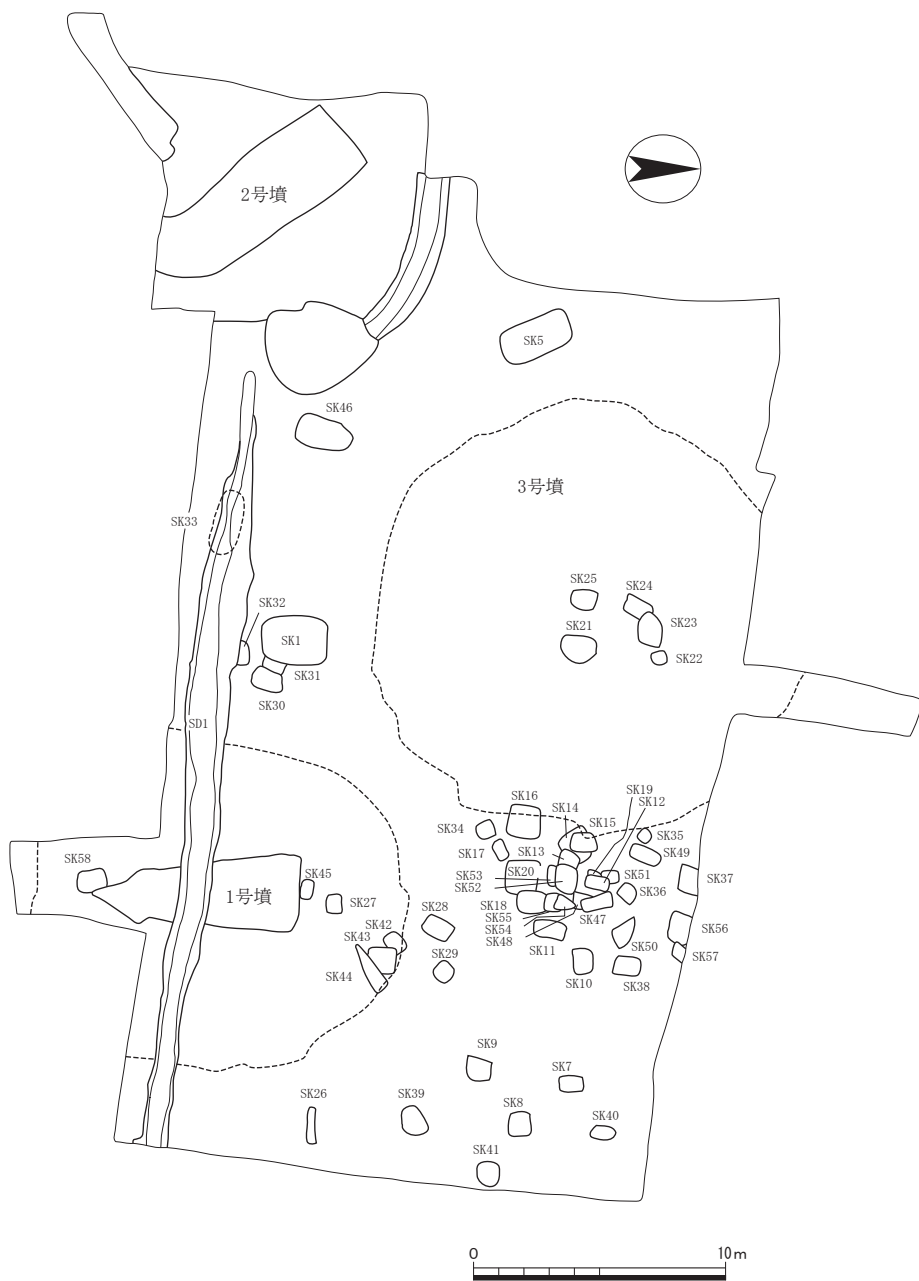


Fig. 12 中世・近世全体遺構図(1:300)

## 第4章 遺物

今回の調査で検出された遺物は、弥生土器から近世陶磁器に至る多種多様の土器類と、古墳時代の金属製品類、中世から近世土壙墓の釘類、および銭貨である。

### 1 古墳時代遺物

#### 土器

被葬者の副葬品として、各石室、周溝などから須恵器の各種完形品、土師器の完形品が出土している。

**1号墳** 石室奥壁部に副葬品の一式と考えられる状態で、須恵器の壺1、脚付壺1(脚が取りさられている)、高杯1、杯身・杯蓋の対になるもの2組が検出された。土師器は壺1が検出された。

**2号墳** 副葬品の一式となる状態が1号墳ほど明確にとらえられなかった。石室内がやや整理されているため、追葬を受けたと考えられ、須恵器等は時期差がある。検出された土器は、須恵器の壺5、脚付壺1(脚が取りさられている)、高杯2(脚部のみ)、杯蓋8、杯身8(内、対になるもの4組)である。土師器は甕1、椀1が検出されている。

**3号墳** 石室部より、須恵器の杯蓋、宝珠つまみ付杯蓋が各1個ずつ。石室付近から杯身8、杯蓋1、壺1。西側周溝より脚付壺1、杯身1が出土している。3号墳の場合、石室部がかなり破壊を受けており。石室内にあった遺物も、周辺に散逸したと考えられる。

**小結** これら、各古墳から検出された土器は、すべて6世紀末から7世紀にかけてのものと考えられる。杯などが全体的に小ぶりになること、矮小化したちあがり、偏平になり、ゆるやかな体部の傾斜をもつこと。またヘラによる調整が粗雑になり、未調整のものまで出現してくること。壺類の肩部のはりぐあいが、緩やかになることなど、現在までに調査され確認された、嵯峨野の古墳時代後期の群集墳から検出された土器類と酷似しており、これらと同系統のものともみなしてまちがいないだろう。

以上、述べてきた土器により、若干の考察を加えてみたい。

1号墳出土の、一式になる須恵器のうちで無蓋高杯(I-S-5)の杯部は、口縁部が中央部の稜線と列点文により底部と分けられるが、小形化しており、脚部も、長脚二段二



方透かしであるが、上段が短くなる。これは『陶邑古窯址群Ⅰ（1966）』（以後『陶邑66』とする）<sup>註12</sup>の編年にあてはめると、TK209の時期に相当する。また同じく杯蓋、杯身の対となるS-1～S-4も、TK209に相当し、『陶邑Ⅰ（1975）』（以後『陶邑75』とする）<sup>註13</sup>の編年においても、TK209に平行する時期とされているKM115にも類型がある。1号墳の場合、奥壁部から出土した一式の須恵器はTK209の時期としてまちがいなからう。

2号墳から出土した須恵器については前述したとおり追葬の痕跡があり、従って副葬された遺物についても同一の時期であるとは考えられないため、最小限二時期に分けてみた。このうち古いと考えられるものはⅡ-S-3・S-4・S-7・S-8の対になる杯蓋、杯身、壺（S-20・S-21）であり、編年上はTK209に先行するTK43頃までのものである。次の時期にはS-2、S-24及び、S-5、S-6の対になる杯身・杯蓋と長脚2段二方透かしの高杯S-15、長頸壺S-17があり、編年上は、TK209からTK217の頃であると考えられる。

3号墳の須恵器については、石室内より検出された宝珠つまみ付蓋がTK217に相当し、また石室付近から出土の杯身（Ⅲ-S-2）も『陶邑75』のKM234に出土例がある。同じく周溝内からの遺物についても、脚付長頸壺（S-10）はTK217をさかのぼらない。以上三基の古墳から出土した須恵器を、須恵器の編年により、古墳の築造、埋葬を順序づけると、

2号墳（第1次）→1号墳 →2号墳（第2次）→3号墳

となる。しかし、実年代上の開きはさほどなく、せいぜい50～60年の間におさまるものと考えられる。須恵器を焼いた窯については近郊の窯が考えられ、京都北部の幡枝の窯<sup>註14</sup>を推定している。

古墳から検出された土師器の数は少なく、3個体である。1号墳より壺（Ⅰ-H-12）が検出されている。全体をヘラでミガキ、薄手で硬く焼きあげられている。2号墳からは椀（Ⅱ-H-22）と甕（Ⅱ-H-23）が検出されている。椀は厚手で、口縁部はほぼ直立しており、焼きはあまり良くない。甕は底部までハケ目があり、ヘラは使用されていない。口縁内部にメ印のヘラ記号がある。近江系と考えられる土師器である。<sup>註15</sup>

## 金属製品

**鉄鏃**（T-1～4、T-6～8） 1号墳・2号墳で検出されており、すべて長頸の鏃である。1号墳より、鑿頭式平根鏃2、鑿頭式棘篋被鏃1、長三角形平根鏃1を検出。2号墳より、柳葉式平根鏃2、腸袂棘篋被鏃1を検出している。<sup>註16</sup>一部、茎の部分に木質を残すものもあつ

た。

**鉄製刀子** (T-5、T-9・10) 2号墳より木質を残した茎の部分が1、刃の部分が2、検出された。刀子全体の形のわかるものはない。いずれも小形である。

**皮吊金具** (T-12) 3号墳より検出。頭の丸い鉾が2本、薄い鉄板を留めた状態で残っている。ただし、四方とも欠損しており使用された位置はわからない。

**不明金具** (T-11) 3号墳より検出。鉾状になっており、頭部の横断面形は円形で、側面には2段の絞りがある。胴部は菱形の断面を呈し、先端部は欠損する。

**銅製環** (B-1～3) 2号墳より、径2cm、断面径0.3cmのものが2、径2.7cm、断面径0.5cmのものが1、検出されている。いずれも腐食が進んでおり、メッキなどの痕跡を残すものはなかった。

**柄頭** (B-4) 1号墳より検出。薄い銅板で作られ装飾はない。しかし所々に金箔が残っているのがみられる。下部に懸通穴を持ち、内部に残る木質の同じ部分にも穴があけられているのがみられた。

## 2 中世・近世遺物と弥生土器

### 土器・瓦

土壙墓より検出された土器類は土師器皿が主となり、他は埋土内にまぎれこんだと思われる破片ばかりで、時代推定の参考に留めた。SK5・46から、復元可能なものが出ており、鎌倉時代のもと考えられる。SD7からは、鎌倉時代に属する土師器皿の復元可能なものが10数点検出されている。同じく、平安時代後期の瓦も多く含んでいるが、瓦当面を持つものはない。丸瓦、平瓦ともに小ぶりで、丸瓦は長さ28cm、うち玉縁部分3.5cm、幅10cm、厚さ1.5cmである。凸面はタタキ目、凹面が布目となっている。丸瓦部分の、玉縁に近い部分にはヘラ記号がある。平瓦は長さ

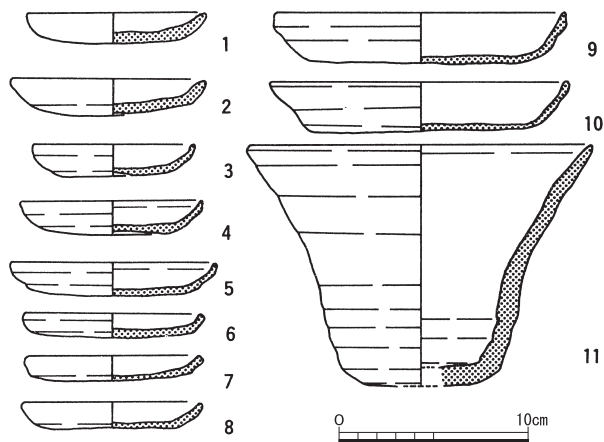


Fig. 13 中世・近世土師器実測図 (1:4)

23.5cm、幅16cm、厚さ1.5cmで、凹面は布目、凸面は指頭によるナデと圧痕がみられる。

## 釘

土壌墓から棺をとめたと考えられる釘類が総計108本検出されている。長さ12cmを越すと思われるものから4cmほどのものまで、各種に分けられるが、一土壌内ではほぼ同規格のものが使われており、また、時期の近いものでは差はみられない。今回検出された釘は木質部を多く残しており、板と板の間に酸化物がたまり明瞭な線をなしていることと、互い違いの木目の具合から、板の厚さや目地がわかる。これによると棺に使用された板材の厚さは1.5cm～2cmの間であり、釘の大小にあまり関係がない。材質は針葉樹系とみられる。

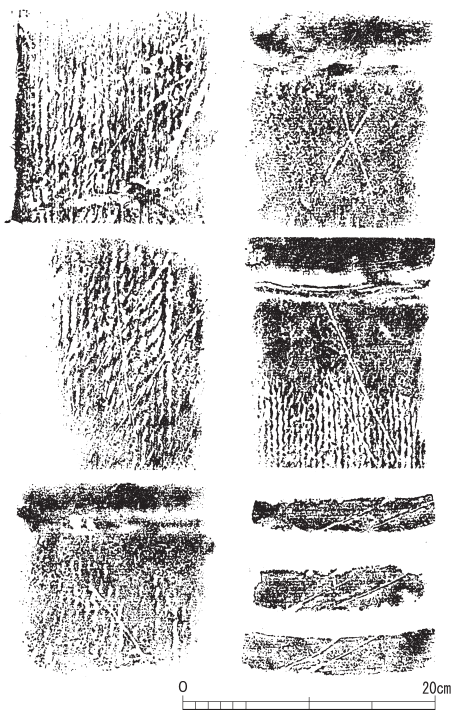


Fig. 14 瓦ヘラ記号拓本 (1:6)

**釘のタイプ** 遺構の章で述べたとおり、墓群は3層に分けることができた。第1層に属する釘は検出されなかったが、第2層、第3層に属する釘は検出されていて、タイプはこの二つに大別でき、さらに、若干の分類ができた。

(単位 cm)

第 2 層					第 3 層				
	長 さ	断 面 径	頭 部 形 態	図 版 番 号		長 さ	断 面 径	頭 部 形 態	図 版 番 号
A	7以下 5.5以上	0.4×0.4	折り曲げ	19、22、49、50	F	10以下 9以上	0.5×0.5	方 形	16、35、39、43 45、46、47
B	5.5以下 4以上	0.4×0.2	長 方 形	2、4、5、6 7、9、17、23 24、25、28	G	8以下 6以上	0.4×0.3	折り曲げ	27、29、30、31 32、33、34、36 37、38、40
C	5.5以下 4以上	0.2×0.2	折り曲げ	3、8、11、13 18、20	H	6以下		折り曲げ	1、14、15
D	5.5以下 4以上	0.2×0.2	方 形	10、12	I	錠			51、52
E	10以上 のもの			26、41、44、48					

Tab. 2 釘観察表

## 錢貨

土壙墓に、副葬品として埋められていた六道銭がすべてである。輸入銭であると思われるが、一部、私鑄銭の疑いをもたれるものもある。

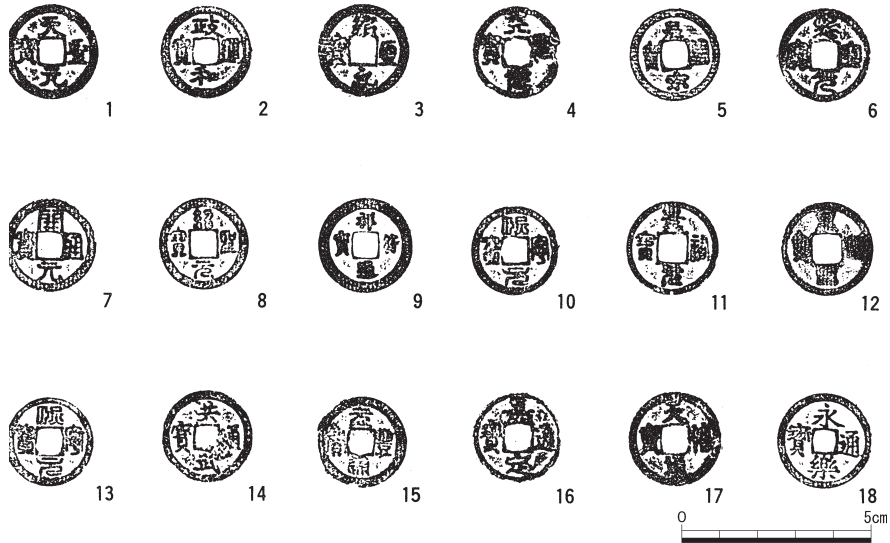


Fig. 15 錢貨拓本 (1:2)

拓本番号	錢貨名	初鑄年	拓本番号	錢貨名	初鑄年
1	天聖元寶	北 宋 (1023)	10	熙寧元寶	北 宋
2	政和通寶	北 宋 (1111)	11	景祐元寶	北 宋 (1034)
3	紹聖元寶	北 宋 (1094)	12		
4	天聖元寶	北 宋 (1023)	13	熙寧元寶	北 宋
5	皇宋通寶	北 宋 (1039)	14	洪武通寶	明 (1368)
6	熙寧元寶	北 宋 (1068)	15	元豐通寶	北 宋 (1078)
7	開元通寶	南唐即位4年 (966)	16	嘉定通寶	北 宋 (1208)
8	紹聖元寶	北 宋 (1094)	17	天禧通寶	北 宋 (1018)
9	祥符通寶	北 宋 (1002)	18	永樂通寶	明 (1368)

Tab. 3 錢貨表

## 五輪塔

3号墳の墳丘東より2体、上下端が破損した状態で検出している。一方は各輪とも残っており、刻まれた梵字と年号「永正〇 (1504～20) 七月十七〇」と戒名「浄新禅〇」が読める。一方は、風輪以上が欠けており、年号はないが「七月廿一日」戒名の「宗祐禅門」が読みとれる。

## 弥生土器

古墳の封土内から、10 数点におよぶ弥生土器の破片が検出されている。畿内第Ⅱ・Ⅲ様式<sup>註17</sup>に含まれると思われる頸部 (E-6)、底部 (E-10・E-11) と、第Ⅳ様式の二時期に分けられる。

第Ⅳ様式グループの壺には、口縁端部が上方下方に突出する E-2、上方にのみ突出する E-3 があり、これらは口縁外

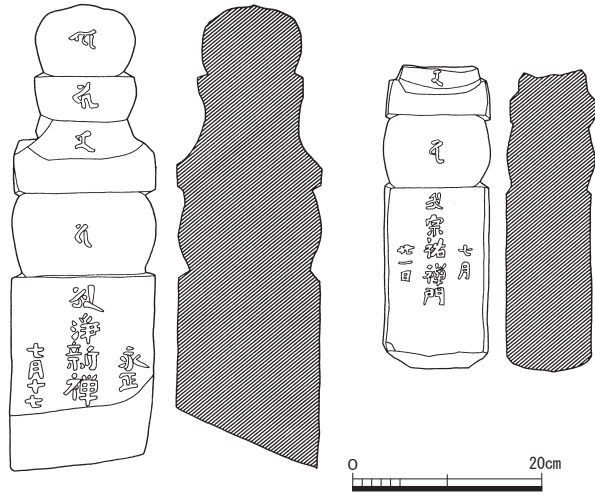


Fig. 16 五輪塔実測図 (1:8)

周に 2 本の沈線を持つ。また口縁が大きく外傾する E-1、ほぼ水平に開く E-4 がある。体部に波状文、平行線文をもつ E-5、タタキやハケ、クシで調整した E-1～4 がある。底部は、高台をもつ E-8 を除き、調整された平底である。高杯は裾部と端部の境に段をもつ E-7 と筒部がある。

比較的摩滅の少ないものが多く、弥生時代の遺跡が近くに存在することを推測させる。

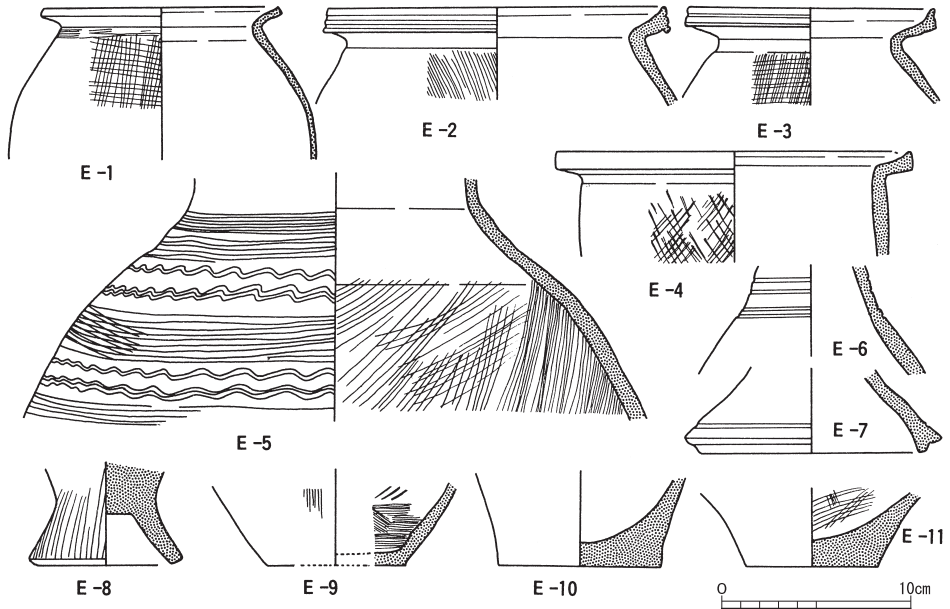


Fig. 17 弥生土器実測図 (1:4)

## 註

- 1 杉山信三「院の御所と御堂」奈良国立文化財研究所 1962
- 2 『嵯峨野の古墳時代』 京都大学考古学研究室 1971  
『京都府文化財報告』京都府 1961 『京都の歴史』 学芸書林 1970
- 3 石光山 4 号墳、14 号墳、18 号墳などの木棺直葬墓主体部から、副葬された須恵器杯、壺、高杯などが出土しているが、主体部 1 基に高杯は 1 個であるのに対し、他の遺物、壺、杯類は複数出土している。白石太一郎・河上邦彦・亀田 博 他「葛城・石光山 古墳群」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 31 冊
- 4 古墳出土人骨の人類学的調査は、まだ行っていない。
- 5 2 号墳同様、3 号墳も南部の周溝は、はっきりしない。
- 6 『嵯峨野の古墳時代』 京都大学考古学研究室 1971  
上原真人「御堂ヶ池群集墳第 20 号墳」 六勝寺研究会 1973
- 7 註 6 と同。
- 8 樋口隆康「京都嵯峨野広沢古墳」 京都府文化財調査報告書第 22 冊 1961  
調査者は、有袖式石室とするが、袖石は明確でなく、無袖式の横穴式石室と考える。前記の御堂ヶ池 20 号墳調査報告書で上原氏も同様に無袖式とする。
- 9 10cm 程度の角の部分が 2 片、他の部分が 3 片検出されている。また、細い破片が散乱していた。
- 10 同様の構造の石室をもつ墓は、1976 年、平安京調査会が行った上京区室町出水の発掘調査において、4 基検出されている。
- 11 田辺昭三「陶邑古窯址群 I」平安学園考古学クラブ 1966
- 12 註 11 と同。
- 13 大阪文化財センター 『陶邑 I』 1975
- 14 現在の京都市左京区岩倉幡枝町付近。須恵器のみでなく瓦窯としても有名である。  
『京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡』日本考古学協会年報 1963
- 15 『湖西線関係遺跡調査報告書』 湖西線関係遺跡発掘調査団 1973
- 16 鉄鏃の呼称は、『世界考古学体系 3 日本Ⅲ 古墳時代』平凡社 1959  
水野清一 小林行雄 『図解 考古学辞典』 東京創元社 1959 を参考にした。
- 17 『弥生式土器集成』 東京堂 1939・1968

## 第5章 結 語

今回の調査は、仁和寺子院跡として遺跡比定された地区で実施した。しかし、当初予想した仁和寺子院跡の関係遺構は検出することができなかったが、予想しなかった3基の円墳の存在が明らかとなった。

調査地の太秦、常盤の地は、著名な多くの古墳を包蔵する嵯峨野地域において、古墳時代後期の首長墓系統といわれる大型の前方後円墳が集中している。また、中小の円墳も多く存在していたようであり、これらを裏付ける検出であった。

調査地付近を踏査すると、畑地、宅地に隆起のみられる地点があり、検出した石室に用いたのと同質の石が無造作に転がっていたりする。付近に住む古老の話で、開発の進展する以前には丸太町通北側の西方寺を北端として、太秦自動車教習所のあたりから調査地にかけて、七ツの石塚と呼ばれる隆起が随所にみられたらしく、その一つに、3号墳、あるいは2号墳が想定され、破壊の程度は不明にしても、比較的最近まで古墳としての現状をとどめていたようである。

古墳時代の嵯峨野の遺跡は多様であり、単に古墳のみにとどまらない。調査地の南西にあたる「常盤仲之町集落遺跡」[1977年2月～6月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行った]では、古墳と同時期である竪穴住居が24戸検出されている。同地域・同時代の二つの遺跡の発掘成果により、常盤・太秦地区の古代の姿が明らかにされつつある。とりわけ、この地で最盛期をむかえた秦氏一族の、偉容を誇った蜂岡寺が整おうとした頃、検出された古墳の最後のものも築造されたとみられる。今後、仁和寺子院跡の比定問題も含めて、新たに発見した古墳群の規模、広がり进行を明らかにすることが緊急の課題になる。

## あ と が き

常盤東ノ町古墳群の所在する嵯峨野一帯は、古代の渡来系雄族として著名な秦一族の本拠地である。

嵯峨野丘陵には、天塚古墳・仲野親王陵古墳・蛇塚古墳等々、秦氏首長の墳墓とみられる前方後円墳をはじめ、双ヶ岡・嵯峨七ツ塚・広沢池畔・朝原山・長刀坂・御堂ヶ池に、数基ないし数十基の小古墳を一群とする群集墳が点在する。常盤東ノ町古墳群も、これらの群集墳中の一群であり、付近に所在する首長墓や群集墳との強い関連が想定される。また、常盤東ノ町古墳群の南方に隣接して、常盤仲之町集落跡があり、さらにその南方には、秦氏の氏寺として有名な広隆寺の壮大な伽藍が現存している。これらの古墳・集落跡・寺院等は、文献記録や地理的位置からみて、いずれも秦氏との関連をぬきにしては語り得ないものであり、秦一族の残した歴史的遺産と捉えるべきものであろう。

常盤東ノ町古墳群の発見は、発掘開始当初、まったく予想外のことであった。当地の調査は、はじめ仁和二年(886)創建の仁和寺寺院跡推定地を対象としたものであったが、調査の進行につれて、横穴式石室をもつ3基の円墳と、中・近世の墓址群とが検出されたのである。

一般に、古墳の墳丘は現地表面上に顕在し、一見してそれと判定し得るのが通常である。しかし、この常盤東ノ町古墳群の場合は墳丘の土盛り部分が、いつの頃から削平され、調査に着手した当時は、ほぼ平らな畑地となっていた。稲栄織物株式会社の新社屋に隣接する畑地には、地表がわずかに盛りあがった地点が数箇所あり、恐らくそれらの地点も削平された古墳の痕跡であろうと推測される。

このように、顕在的な遺跡であるはずの古墳が、地下にその痕跡をとどめているというケースは、今後も当然あり得る。当嵯峨野丘陵についても、古墳分布を論じる際には、こうした事態を考慮しておかなくてはならないであろう。

常盤東ノ町古墳群については、今後そのひろがりや築造年代などを、継続的に、かつより精確に検討しなくてはならないが、一応ここでは今回の調査結果を報告し、大方のご教示とご高評を得たいと思う。なお、この調査報告は、当研究所の初仕事であり、種々不十分な点がありますが、それは今後の調査研究活動の中で補うよう努力して行きたい。

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

調査部長 田辺 昭三



調査地近郊古墳一覽表

名称	墳形	墳丘径	墳丘高	石室形態	開口方向	石室長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	現状	遺跡地区番号
丸山古墳	円墳	50	10	両袖式	南	14.7	5.4	3.2	(4.4)	9.3	1.9	(2.4)	完	右京区 18
入道塚古墳	"	"	"	"	"	(11.3)	4.0	2.5	(3.0)	(7.3)	1.6	1.2	全	右京区 19
狐塚古墳	"	28	4.5	"	南	6.1	3.8	2.2	(2.2)	(2.3)	(1.4)	(1.3)	半	右京区 21
広沢古墳	"	30	4.5	無袖式	南々	12.0	4.3	2.2~2.4	2.2	7.7	1.8~1.9	1.4~1.8	消	右京区 24
甲塚古墳	"	38	5.5	両袖式	南	14.4	5.2	2.9	(3.4)	9.2	1.7	(1.8)	完	右京区 28
蛇塚古墳	前方後円墳	全長75		"	南	17.8	6.8	3.8	5.2	(11.0)	2.6	3.4	半	右京区 60
天塚古墳	"	全長73		北無袖式	南々	(8.1)	(8.1)	2.3	(2.2)		1.0	1.5	完	右京区 57
穀塚古墳	"			両片袖式	南	7.7	4.7	1.8	2.0	(3.0)	1.3	1.5	"	"
穀塚古墳	"	全長40.5		竪穴式石室	主軸南北		5.4	2.7	0.9				消	西京区 13
御堂ヶ池1号墳	円墳	30	5.4	両袖式	南	8.2	3.7	2.5	(3.1)	(4.5)	1.4	1.3	完	右京区 11
御堂ヶ池6号墳	"	11	2.3	"	南		3.0	1.5	(1.4)				消	"
御堂ヶ池11号墳	"	10		"		5.0	2.2	1.4	(1.2)	2.8	1.0	(1.0)	消	"
御堂ヶ池12号墳	"	8		無袖式	東			1.1	(1.4)				石室消滅	"
御堂ヶ池13号墳	"	12	6.5	両袖式	東	6.7	3.2	1.4~1.6	(1.3)	3.5	1.0	(1.4)		"
御堂ヶ池14号墳	"	10	5.5	"	南	5.8	2.9	1.4	(2.2)	2.9	1.0		石室消滅	"
御堂ヶ池15号墳	"	8		無袖式	南	4.0		1.0	(0.4)				消	"
御堂ヶ池17号墳	"	11		片袖式	南	6.8	3.4	1.6~1.8	(1.4)	3.4	1.0		現	"
御堂ヶ池20号墳	"	9.5	2	無袖式	南	5.8	2.9	1.1					完	"
双ヶ岡1号墳	"	44	6.5	両袖式	南	(14.4)	6.0	3.4	(4.5)	(8.4)	(2.2)	(1.7)	完	右京区 42
衣笠山1号墳	"	26.5	5	"	西	(6.0)	3.2	2.2	(2.6)	(2.8)	1.4	(1.9)	半	西京区 11
苔寺17号墳	"	15	3	"	南	(5.4)	4.0	1.8	(2.5)	(1.4)			半	西京区 8
苔寺23号墳	"	11	2.5	無袖式	南々		5.5	1.6	1.9				完	"
苔寺26号墳	"	13	4	"	南		(6.5)	1.25	1.55				半	"
松尾山1号墳	"	10	1.5	片袖式	南		1.3	0.7	(0.75)		0.6		半	西京区 6
松尾神社西方2号墳	"			両袖式	南	9.0	3.0	2.0		6.0	0.65		半	西京区 3
上園尾2号墳	"	8	2	無袖式	南		5.9						半	西京区 7
ボウジョウ1号墳	"	17	3.8	両袖式	南	(10.9)	3.4	2.3	3.8	(7.5)	1.3	2.3	完	西京区 5

名称	墳形	墳丘径	墳丘高	石室形態	開口方向	石室長	石室高	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	現状	遺跡地図番号
ボウジ ヨウ2号墳	円墳	14	2.1	両袖式	南	(5.7)	2.6	2.6	1.4	2.1	(3.1)	0.9	1.6	完	西京区 5
ボウジ ヨウ3号墳	"	15	4	"	南々東	(6.8)	3.2	(3.3)	1.9	2.6		1.1	1.5	"	"
北松 尾1号墳	"	10	2.5	無袖式	南		(3.9)		1.4	(2.0)		(0.7)		半	西京区 4
北松 尾2号墳	"	10	2	"	南々東		(2.4)		1.3	(1.5)		(0.8)		"	"
北松 尾3号墳	"	10	3.2	"	南々東		(4.4)		1.1	(1.4)		(0.9)		"	"
北松 尾4号墳	"	10	3	"	南々東		(4.8)		1.4	(2.2)		(0.9)		"	"
大枝 山1号墳	"	16	3.3	両袖式		(4.7)	2.3	(2.4)	2.2	2.2		1.7	(1.45)	消	西京区 16
大枝 山4号墳	"	21	4.1	"	南	(7.9)	3.6	(4.3)	2.1	2.8		1.1	(2.0)	完	"
大枝 山11号墳	"	21.5	3	"	南々西	(6.9)	3.5	(3.4)						"	"
大枝 山15号墳	"	17	5.6	"	南	(9.4)	3.6	(5.8)	2.1	3.1		1.2	2.3	半	撮
大枝 山18号墳	"	16	2.6	"	南	(5.6)	3.3	(2.3)	1.7	2.3		1.1	1.6	"	"
大枝 山20号墳	"	16	4.1	"	南々東	(6.4)	3.6	(2.8)	2.1	2.8		1.0	2.0	"	"
大枝 山21号墳	"	16	4.3	"	南	8.9	3.6	5.3	1.7	2.8		1.1	1.8	完	存
常盤東ノ町1号墳	"	(15)			"	8.4			1.5					消	減
常盤東ノ町2号墳	"	14～15		無袖式	南	8.4			1.7					半	撮
常盤東ノ町3号墳	"	18～20			南									"	"

中 世 ・ 近 世 土 壙 墓 表

土壙墓名	掘 形 (単位 m)			埋葬状態	人 骨	埋 土	遺 物	備 考	層 序
	形態	長さ・幅	深さ						
SK1	長方形	2.6 1.95	0.4	木棺を石室内に安置。	なし	3号墳の封土と地山の混った土で埋められている。暗茶褐色をなす。	釘 鏃 須恵器 灰釉陶器 磁器 瓦	床面に一部平安末の瓦が使用されている。地山は黄褐色泥砂。3号墳封土は黒褐色泥土。	第3層
SK5	長方形	2.9 1.7	0.6	木棺。		地山とSD3の黒褐色土の混った黄褐色泥砂。	土師器皿 陶器	SD3埋土上にある。	第3層
SK7	長方形	1.0 0.6	0.3	木棺。頭を北向きに埋葬。	あり 残りは悪いがほぼ全身がわかる。	黒褐色土	釘 銭貨 漆器表皮		第2層
SK8	方 形	1.0 1.0	0.8	木棺。座棺。頭骨中央部。	あり 頭骨残り悪い。	黒褐色土	釘 陶器		第2層
SK9	長方形	1.0 0.6	0.8	木棺		黒褐色土		棺の痕跡あり。	第2層
SK10	長方形	1.1 0.8	0.03	木棺		地山と黒褐色の混入土。	釘 土師器	底部のみ残存。	第2層
SK11	長方形	1.4 0.8	0.1	木棺 頭を北向きに埋葬。	あり 頭骨、上腕骨のみ。	地山と黒褐色の混入土。	釘 土師器 銭貨 漆器表皮	紹聖元寶	第2層
SK12	長方形	1.0 0.8	0.3	木棺		黒褐色土	釘 陶器 土師器 瓦		第2層
SK13	方 形	1.0 不明	0.05			地山と黒褐色の混入土。		最底部のみ痕跡。 東側をSK52に切られている。	第2層

土壙墓名	掘形 (単位 m)			埋葬状態	人 骨	埋 土	遺 物	備 考	層 序
	形態	長さ・幅	深さ						
SK14	方 形	1.2 1.2	0.3	木棺 座棺		黒褐色土で 所々地山の 土がまじる。	土師器 須恵器	SK13・15 に切られて いる。	第2層
SK15	長方形	1.1 0.8	0.6			地山と褐色 の混入土。			第1層
SK16	方 形	1.2 1.3	0.9	木棺 座棺に埋葬 されている。 頭骨北	ほぼ全身良 好に残存。	棺内 茶褐色砂質 土。 棺外 茶褐色砂質 と黒褐色の 混入土。	釘	他に比較し 骨格が大柄 である。 掘形内にお いて棺の内 外の土質が ちがう。	第2層
SK18	長方形	1.3 1.0	0.5		あり 歯 大腿骨	黒褐色土	土師器		第2層
SK20	方 形	1.0 1.0	1.0	木棺 座棺に埋葬 されている。 頭骨北	ほぼ全身良 好に残存。	黒褐色土	釘 土師器 瓦 銭貨 漆器表皮	六道銭が竹 のカゴのよ うなもの 中に入れら れていた。	第2層
SK26	長方形	0.55 1.6	0.1	棺 寝棺	ほぼ全身良 好に残存。	黒褐色土	釘	かなり良好 に残存。	第2層
SK27	方 形	0.8 0.8	0.3			黒色土	羽釜 (瓦器) 土師器		第2層
SK28	長方形	1.3 0.8	0.05			黒色土	土師器 須恵器 瓦片		第2層
SK29	方 形	0.8 0.8	0.45			黒色土	土師器		第2層
SK34	方 形	0.8 0.8	0.2			黒褐色土			第2層
SK36	方 形	0.8 0.8	0.2			黒褐色土			第1層

土壙墓名	掘形 (単位 m)			埋葬状態	人 骨	埋 土	遺 物	備 考	層 序
	形態	長さ・幅	深さ						
SK37	不 明	不明 1.1	0.4			黒褐色土と 茶褐色砂の 混ったよう な土。			第1層
SK38	長方形	1.0 0.6	0.2			黒褐色土			第2層
SK40	長方形	1.0 0.5	0.25	おそらく木 棺。		黒色土	土師器		第2層
SK41	方 形	0.7 0.9	0.5	おそらく木 棺。		黒色土			第2層
SK43	方 形	1.0 1.0	0.02			黒色土			第2層
SK45	長方形	0.5 0.7	0.6	木棺 座棺に埋葬 されていた。	あり	黒色土	銭貨 釘 漆器表皮		第2層
SK46	長方形	1.8 1.0	0.35	木棺 寝棺		茶褐色と黒 褐色の混合 土。	土師器皿 (完形5枚) 釘 鎌		第3層
SK47	長方形	1.1 0.5	0.1	木棺		黒褐色と黄 褐色の混入 土。		礫少し含む。	第1層
SK48	方 形	不明	0.6	木棺 座棺	頭骨 手足	黒褐色と黄 褐色の混入 土。	銭貨 釘 漆器表皮		第2層
SK49	長方形	1.0 0.5	0.3			黒褐色と黄 褐色の混入 土。			第2層
SK50	不整形	1.0 0.8	0.4			暗茶褐色砂 質土。		礫少々含む。	第1層
SK51	方 形	0.6 0.5	0.1			黒褐色と茶 褐色砂の混 入土。			第2層

土壙墓名	掘形 (単位 m)			埋葬状態	人 骨	埋 土	遺 物	備 考	層 序
	形態	長さ・幅	深さ						
SK52	方 形	0.9 0.1	0.2			黒褐色土			第 2 層
SK53	不 明	不明 0.6	0.1			黒褐色土			第 2 層
SK55	方 形	0.6 0.6	0.2			黒褐色土			第 2 層
SK56	不 明	不明 0.2	0.4			黒褐色と茶褐色砂の混入土。			第 1 層
SK57	不 明	不明	0.1			黒褐色と茶褐色砂の混入土。			第 1 層
SK58	長方形	1.1 0.4	0.6			黒褐色と黄褐色砂の混入土。	弥生土器 土師器		第 2 層

## 付記

土壙墓から出土した人骨で、比較的残存状態が良好だった一部について、京都大学理学部自然人類学科大学院の毛利俊雄氏に鑑定を依頼した。

その結果以下のことが判明した。

中世・近世土壙墓群 SK11 成人 性別不明

SK16 成人 //

SK20 老人 女

SK26 20歳前の青年 性別不明

以上は残存していた頭骨および歯、手足の骨からの判定である。また SK20 については性別判定の目安となる骨盤が残っていた。

これらは現場で取り上げた後での鑑定でもあったが、もし検出した時の状態で行なわれたならば、より以上の成果が期待できたと思われ残念である。

出土土器表

番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
1号墳 S-1	須恵器 杯蓋	全体に丸みをおびた器体を持ち、天井部と体部を画する稜線はみられない。	全体的にナデ。天井部は粗くヘラケズリされている。	淡い青灰色 砂の粗い粒を含む。	(I-S-14) S-2 とペア
S-2	杯身	たちあがりは短かくわずかに内傾する。体部はなだらかな傾斜をもつ。	全体にナデ。底部のみヘラで粗くケズる。	灰白色 焼成は不良 砂粒子を多量に含む。	
S-3	杯蓋	S-1 と同じ。		乳白色 焼成は不良 砂粒子を含む。	S-4 とペア
S-4	杯身	たちあがりは短かく内傾する。受け部を上方に折り曲げ、たち上がりとの間に凹帯をつくる。底部は尖がり気味である。	全体にナデ。底部はヘラケズリされている。	暗灰色 砂粒子を含む。	
S-5	高杯	杯部は列点文と稜線によって口縁部と底部が分けられる。脚端部はほぼ直立し段がなくなる。脚部中央に2条の凹線が入り、透かしを二分する。上段がやゝ短くなる。	杯底部のみヘラケズリされている。他はナデがされている。	黄灰色 焼成は不良 砂粒子を多量に含む。	長脚二段二方透かし。
S-6	杯身	たち上がりは低く内傾する。他はS-2 と同じ。	ナデ。底部は未調整。	青灰色 砂の微粒子を含む。	自然釉がかかる。
S-7	直口壺	口頸部がやゝ内湾気味に、丸い端部につながる。肩の張りは目立たず、なだらかな曲線を描く。	ナデで仕上げをし、底部はヘラケズリ。	青灰色 砂粒子を多く含む。	

番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
S-8	直口壺	口頸部中頃から開き気味に肉厚の丸い端部に至る。肩部は丸く、底部は尖っている。	全体にナデ。底部はヘラケズリされているが粗雑。	白青灰色 砂粒子を多量に含む。	口縁部が歪む。
S-9	杯身	たちあがりが高くかなり内傾する。身が扁平で浅くなっている。	全体にナデ。底部は未調整。	淡青灰色 砂粒子を含む。	
S-10	脚付長頸壺	やゝ外傾する口頸部を持ち、端部は肉厚で丸い。肩部の張りぐあいは、なだらかに丸みをおびてくる。	全体にナデているが底部のみヘラケズリされている。	淡青灰色 砂粒子を含む。	脚部が取りはずされている。底部に脚を付けやすくするための刻みがみられる。
S-11	直口壺	口縁部と端部の間に段ができる。端部はやゝ内傾し内側に丸い突起部を持つ。肩はやゝ張り気味であるが明確に稜線をつくるにはいたらない。底部は尖り気味。	全体にナデ。底部のみヘラケズリされている。	灰白色 焼成はやゝ悪い。 砂粒子を多量に含む。	蓋がつく？
H-12	土師器壺	口頸部は外傾し、かすかな凸帯を持つ端部につながる。平らな底部と球形に近い体部を持つ。	口頸部は縦に、体部は横にヘラミガキされている。底部はヘラで調整されている。	赤褐色 砂粒子を含む。	
2号墳 S-1	須恵器 杯蓋	1号墳 S-1 と同じ。	ナデ。 天井部は未調整。	青灰色 砂粒子を含む。	( II -S-24)
S-2	杯身	1号墳 S-9 と同じ。		淡い青灰色 砂粒子を含む。	
S-3	杯蓋	天井部が平らで内湾した体部を持つ。天井部と体部との境いにわずかに凹帯がみられる。	全体にナデ。天井部のみヘラケズリされている。	青灰色 白い砂粒子を多量に含む。	



番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
S-4	杯身	たちあがりはやゝ内傾するが端部に近くなり直立する。身は浅く偏平。	全体にナデ。底部はヘラケズリされている。	青灰色 粗い石黄質の砂の粒を多く含む。	(Ⅱ -S-25)
S-5	杯蓋	1号墳 S-1 と同じ。		黄灰色 焼成不良 砂粒子を多く含む。	
S-6	杯身	たちあがりは低く内傾する。全体に丸みをおびた器体を持ち、天井部を画する稜線はみられない。	全体にナデ。天井部は粗くヘラケズリされている。底部は未調整。	青灰色 砂粒子を多く含む。	
S-7	杯蓋	1号墳 S-1 と同じ。		青灰色 砂粒子、黒色の粒子を含む。	
S-8	杯身	たちあがりはやゝ内傾するが端部に近くなり直立する。身は浅く偏平。	全体にナデ。底部はヘラケズリ。	暗青灰色 砂粒子を多量に含む。	
S-9	杯蓋	偏平な天井部に、まっすぐな体部が続く。天井部と体部の境に稜線、および凹帯がみられる。	全体にナデ。天井部はヘラケズリされている。		
S-10	杯身	2号墳 S-8 と同じ。	全体にナデ。天井部はヘラケズリされている。	黄灰色。 焼成は不良。 砂粒子を多く含む。	
S-11	杯蓋	2号墳 S-3 と同じ。天井部と体部を画する凹線が明らかである。		青灰色。 砂粒子をやゝ多く含む。	
S-12	杯身	2号墳 S-8 と同じ。		暗灰色。 粗い砂粒を多く含む。	自然釉が多くかかっていたものが、はげおちている。

番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
S-13	杯身	2号墳 S-8 と同じ。		灰色。 黒色の砂粒子を含む。	
S-14	広口壺	ほぼ直立した短かい口頸部を持ち、尖り気味の端部に至る。全体に扁平で浅い。肩部に明瞭な稜線がみられる。	全体にナデがされている。	暗青灰色。 砂粒子を含む。	
S-15	高杯	1号墳の S-5 と同様。 列点文がない。	1号墳の S-5 と同様。	青灰色。 砂粒子を含む。	長脚二段二方透かし。
S-16	高杯	筒部の下段裾部のみ。裾端部等は S-5 に同じ。		赤褐色。 砂粒子を多量に含む。	三方の透かしがある。
S-17	長頸壺	平たい体部に細長い頸部がつく。 口頸部は端部に近づくに従って薄くなる。体部中央にクシガキ文があり、それをはさんで2本の凹線がめぐる。 底部は平らにされている。	全体にナデ仕上げされている。	青灰色。 砂粒子を多く含む。	頸部を取り付ける際、切り落とした粘土が壺内底部に残る。
S-18	直口壺	小形。 やや丸みをおびた肩部を持つ。 稜線は認められない。 丸底である。	全体にナデ。 底部はヘラケズリ。	青灰色。 砂粒子を含む。	ほぼ完形。
S-19	脚付長頸壺	口頸部中頃から外反し、丸い端部に至る。肩部の張りは、なだらかで丸みをおびている。	全体にナデ。	灰青色。 砂粒子、黒色粒子を多量に含む。	底部に脚が取付けられた跡があり、またそのための刻みがみられる。
S-20	広口壺	口頸部中頃の凹線から外反し上下に段を持ち、口縁部端に至る。 端部外周中央部がや	体部のタタキメをハケで消す。 底部に格子目状のタタキメが残る。	灰白色 密	体部中央の孔は焼成前であるが、もともと臙として作られたものではない。

番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
S-20	広口壺	や突出する。 口頸部には4本の凹帯を持つ。 肩部は緩やかなで肩。 丸底。			
S-21	広口壺	口頸部はわずかに外反し、端部が段をなして下方に突出する。体部は丸く明瞭な肩を持たない。 口頸部にクシガキ文を持つ。 丸底。	全体にナデ。 体部の1/3から丸い底部にかけてハケで調整されている。	青灰色。 黒い砂粒子を含む。	
H-22	土師器 椀	丸底にほぼまっすぐの体部を持つ。 口縁部は端部に至って細くなり、端部は丸い。	全体にナデ。 底部のみヘラ調整されている。	茶褐色。 砂の微粒子を含む。	
H-23	甕	わずかに内湾する口縁部と丸い端部を持つ。 体部は緩やかな曲線を書いて丸底に至る。	外面はハケメが底部までされている。 内面も体部にハケメがみられる。 口縁部はナデ、ヘラ記号がされている。	茶褐色 砂粒子を多く含む。	近江系の土師器。
3号墳 S-1	須恵器 杯蓋	小形である。 笠形の器体の天井部頂上に乳頭形のつまみを持つ。 かえりが端部より突出する。	頂部はヘラケズリ。 他はナデがされている。	青灰色。	宝珠つまみ付。 (I-S-13)
S-2	杯身	たちあがりを持たない。 平底でやゝ外傾した体部を持つ。 口縁端部はやゝ尖り気味。	全体にナデ。 底部のみヘラケズリされている。	青灰色。	

番 号	器 形	形態の特徴	手法の特徴	色 調・質	備 考
S-3	杯 身	1号墳 S-2 と同じ。		淡青灰色 砂粒子を少し含む。	
S-4	杯 身	1号墳 S-2 と同じ。		淡青灰色	
S-5	杯 身	たちあがりは低く短い。 全体に偏平で身はあさい。 体部から、ほとんどまっすぐ受け部につづく。	ナデ。 底部は未調整。	青灰色 砂粒子をやゝ多めに含む。	
S-6	杯 身	1号墳 S-4 と同じ。		暗灰褐色 砂粒子をやゝ多めに含む。	
S-7	杯 蓋	1号墳 S-1 と同じ。		黄灰色	
S-8	杯 蓋	1号墳 S-1 と同じ。		淡灰色	
S-9	直 口 壺	口頸部は、ほぼ直立し、中央に凹線をもつ。 肩部は明瞭でなく丸くなだらか。	全体にナデ。	暗青灰色 砂粒子がやや多い。	
S-10	脚付長頸壺	細い頸部は中央部の凹帯を境に外傾し、尖り気味の端部に至り、頸部付根から緩い傾斜で凹帯を持つ 肩部に続くが、張りは少ない。 脚部は短かく、三方透かしを持つ。 筒部から裾部へは段をなして続く。	壺底部のみヘラケズリ。 他はすべてナデがさされている。	青灰色 かなり大粒の砂粒子を含む。	
中世・近世 土 壙 墓	土 師 器				
1	皿	器体は浅く全体に肉厚。	手づくねである。 口縁部のみナデ。	茶褐色 粗い砂を含む。	SD7
2	皿	口縁端部は丸い。	他は未調整。		

番号	器形	形態の特徴	手法の特徴	色調・質	備考
3	皿	共通して口縁が直立し、体部に押圧による凹帯をもつ。	手法は1・2と同じ。ただし比較的ていねいにつくられている。	暗茶褐色 粗い砂を含む。	SK5
4	皿	口縁端部はうすくなり、丸みをもつ。		茶褐色 砂は細かい。	
5	皿				
6	皿	器体は浅く偏平。体部に凹帯が入る。	1・2と同じ	茶褐色	SK46
7	皿	口縁端部は尖り気味。		粗砂を混入する。	
8	皿				
9	皿	口径15cm。口縁部は、ほぼ直立し、端部はやゝ尖り気味。体部に凹帯をもつ。	口縁部および体部内側はナデ。底部内側をタテナデ。底部外側は未調整。	茶褐色	SK5
10	皿	口径15cm。底部から直線的に外傾する体部をもつ。口縁端部は丸い。	9と同じ。	淡い茶褐色	SK46
11	鉢	いわゆる製塩土器といわれるもの。肉厚で粘土ひもの巻きあげたあとを残す。体部中ほどより外反し、開き気味になる。	内部を粗くナデしている程度で、ほとんど調整はみられない。	茶褐色	

中世・近世土壙墓出土釘表

土壙	番号	全長 現存長 (cm)	体部断面 最大部 (mm)	遺存状態	頭部の形態	木質付着状態	板材厚 (cm)
SK1	15	5.7	4×3	完存	I	中部より木目の方向がかわる。	2.0
"	29	6.8	2.5×4	完存	H	下部に木質の残りがみられる。	
"	30	6.8	3×3	完存	H	全体的に付着。	1.7
"	31	7.8	4×4	完存	H	体部に付着。	1.5
"	32	7.0	25×3	完存	H		
"	33	7.5	4×5	完存	H	頭部を除いてほとんど付着。	2.0
"	34		4×3.5	頭部から6.5cm残る。	H	木目は正目ですべて横。	1.8
"	35		3×4	頭部から6cm残る。	G	木目ははっきりしない。	
"	36		4×3	頭部から6cm残る。	H	下部付着。	2.8
"	37	6.8	4×4	完存	H	体部に付着。	1.9
"	38	7.7	5×5	完存	H	部分的に付着。	1.5
"	39	8.6	5×5	完存	G	上部、下部に部分的に付着。	
SK5	1	3.3	4	先端から3.7cm残る。	I	全体的に付着。	
"	16			頭部から5.3cm残る。	G	中部に付着。	1.9
"	40	6.9	4×4	完存	H	全体的に付着。	1.7
"	42	11.3	9	完存	I		
"	43	8.8	4×6	完存	G	下部を除いて付着。	1.6
"	52		7×4	(鏝)4.4cm残る。	I	頭部のみ付着。	
SK7	2		3×1.5	頭部3.6cm残る。	B		0.8
"	17		2×4	頭部から4cm残る。	B	全体的に付着。	1.8
"	18		2×2	頭部から4.5cm残る。	C	頭部に付着。	0.8
"	19		3×3	完存	A		
SK10	50		4×4	頭部から4.7cm残る。	A		
SK11	44		6×6	頭部から8.3cm残る。	E		
	49	5.7	5×5	完存	A		

土 壙	番号	全長 (cm)	体 部 断 面 最大部 (mm)	遺 存 状 態	頭部の形態	木 質 付 着 状 態	板材厚 (cm)
SK20	3	4.9	2×3	完 存	C	正目、木目が粗い。	1.1
"	4	4.0	3.5×3	完 存	B	全体的に付着。	
"	5		2×4	頭部から3.5cm残る。	B	頭部から1.8cm下に付着。	
"	6	4.7	2×3	完 存	B	ほとんどなし。	
"	7		3×3	頭部から4.9cm残る。	B	分岐線から下に付着。	
"	20	5.5	4×3	完 存	C		
"	21	5.7	3×3	完 存	B	分岐線まで付着。	
"	22	5.7	4×4	完 存	A	分岐線より下に付着。	
"	23	3.4	5	頭部より3.5cm残る。	B	下部に付着。	
"	24	5.2	3×4	完 存	B	全体的に付着。	
"	25	5.6	4×4	完 存	B	分岐線から上と下部に付着。	
"	26		6×5	頭部から6.8cm残る。	E		
"	41		4×6	頭部から7cm残る。	E		
"	48		6×5	頭部7cm目から折れ 曲がって残る。	E		
SK26	9	2.8	2×3	完 存	B	全面正目で付着。	0.9
"	10	4.2	2×3	下部が少し曲がっている。	D	全面正目で付着。	
"	11	4.6	2×4	完 存	C	頭部を除いて付着。	
"	12		2.5×2	頭部から3.8cm残る。	D	全面的に付着。	
"	13		2.5×3	頭部から3.8cm残る。	C	上部と下部に付着。	
SK46	14			頭部から4cm残る。	I	全体に部分的に付着。	1.4
"	27			頭部から5.3cm残る。	H	頭部から1cm以下に付着(2cmほど)。	
"	45	9.3	4×3	完 存	G	頭部から4.3cm以下に付着。	
"	46	9.8	5×5	完 存	G	頭部から4.2cm以下に付着。	
"	47	9.2	5×3.5	完 存	G	全体的に付着。	
"	51			( 鏝 )	I		
"	28	5.3	3×4	完 存	B	分岐線から下に付着。	

古墳出土金属製品表

	番号	種類	全長 (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	残存状態 (cm)	備考
1号墳	T-1	鑿頭式棘籠被鎌	8.4	2.1	(丙) (柄) 3 3×5	完 存	
"	T-2	鑿頭式平根鎌	9.2	2.4	4 4×4	完 存	
"	T-3	鑿頭式平根鎌	8.7	2.2	4 3×4	完 存	
"	T-4	長三角形式平根鎌	13.2	1.4	2 4×6	完 存	
"	T-18	釘		6×7		先端を欠く 8.4	
"	B-4	柄 頭	6.0	4.9×2.2			金箔が付着する。 内部に木質を残す。
2号墳	T-5	刀 子		1.4		刃先のみ 7.6	
"	T-6	脇袂式棘籠被鎌	11.1	3.1	2 4×5	完 存	柄に木質を残す。
"	T-7	柳葉式平根鎌	10.8	2.2	2 4×2	完 存	柄に木質を残す。
"	T-8	柳葉式平根鎌		2.7	2	柄を欠く 6.6	
"	T-9	刀 子		1.5	4	丸部のみ 20.0	
"	T-10	刀 子		1.4	4×2	柄部のみ 13.8	柄に木質を残す。
"	T-13	釘		4×4			
"	T-14	釘		4×4		体部のみ	木質部を残す。
"	T-15	釘		3×4			
"	T-16	釘		4×4			
"	B-1	環	径 2.2		3	完 存	
"	B-2	環	径 2.0		3	完 存	
"	B-3	環	径 2.7		5	完 存	
3号墳	T-11	不明金具		1.7		先端を欠く 3.4	紙か?
"	T-12	皮吊金具	4.7 (現存寸法)	1.3	4	完 存	一部のみ
"	T-17	釘	9.1	5×6 T13～18は 断面径。	B-1・2・3 は断面径。		



PUBLICATIONS OF KYOTO ARCHAEOLOGICAL  
RESEARCH INSTITUTE (INC.)

No.1

**SURVEYS ON A GROUP OF BURIAL MOUNDS  
AT TOKIWAHIGASHI-NO-CHO (KYOTO)**

**ENGLISH SUMMARY**

KYOTO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE (INC.)

1977

## Contents

Chapter I	Survey	
1.	Start of research work.....	1
2.	Progress of research work.....	2
Chapter II	Location and history	
1.	Location.....	5
2.	History.....	5
Chapter III	Site	
1.	Site of the kofun period.....	8
2.	Tombs of the medieval and the modern period.....	18
3.	The other site.....	22
Chapter IV	Artifacts	
1.	Artifacts of the kofun period.....	24
2.	Artifacts of the medieval and the modern period.....	26
Chapter V	Conclusion.....	31
Supplementary Tables		
1.	List of adjacent the burial mound.....	33
2.	The Tombs of the medieval and the modern period.....	35
3.	Earthenware.....	39
4.	Miscellaneous metal from the burial mound.....	46
5.	Nails from the Tombs of the medieval and modern period.....	48
English Summary..... 49		
Plans and Sections		
1.	Site	Plan of site
2.		Sections
3.	Structural remains	The stone chamber of the 1st burial mound
4.		The stone chamber of the 2nd burial mound
5.		The stone chamber of the 3rd burial mound
6.		Sections of burial mounds
7.		The stone chamber (SK1)
8.		Tombs of the medieval period (SK26.46)
Plates		
1.	Site	General view of adjacent site
2.		1) General view seen from north-west 2) General view seen from west
3.	Structural remains	1) General view of stone chamber of the 1st burial mound 2) Artifacts seen from north-west of the 1st burial mound 3) Artifacts from stone chamber of the 1st burial mound 4) General view of stone chamber of the 2nd burial mound
4.		General view of stone chamber of the 2nd burial mound

5. 1) General view of the 2nd burial mound seen from south-west  
2) General view of the 3rd burial mound seen from west
6. 1) General view of stone chamber of the 3rd burial mound  
2) Sections of ditch of the 3rd burial mound
7. 1) Tombs of the medieval and modern period  
2) General view of the L ditch (SD7)
8. 1) General view of stone chamber of the medieval period (SK1)  
2) General view of the tomb of the medieval period (SK46)  
3) The bone of the tomb of the medieval period (SK26)  
4) General view of remains of structure (SB1)
9. Artifacts Sue type pottery of the 1st burial mound
10. Sue type pottery of the 1st burial mound
- 11-13. Sue type pottery of the 2nd burial mound
14. Haji type pottery (H23) of the 2nd burial mound and Sue type pottery of the 3rd burial mound
15. Miscellaneous metals of the 1st and 2nd burial mound
16. Miscellaneous metals of the burial mounds, Haji type pottery
17. Nails from tombs of the medieval and modern period, Gorinto and coins
18. Yayoi type pottery
19. Earthenware (Kofun period)
20. Earthenware (Kofun period)
21. Miscellaneous metals (Kofun period)
22. Nails (The medieval and the modern period)

#### Figures and Diagrams in Text

1. Location . . . . .	1
2. Distribution of site . . . . .	7
3. Section of the 1st burial mound . . . . .	8
4. Distribution of artifacts in the 1st burial mound . . . . .	10
5. Sections of the 2nd burial mound . . . . .	12
6. Distribution of artifacts in 2nd burial mound . . . . .	15
7. Sections of the 3rd burial mound . . . . .	17
8. Sections of tombs of the medieval and the modern period . . . . .	18
9. SK5 (The medieval and the modern period) . . . . .	19
10. SK20 (The medieval and the modern period) . . . . .	21
11. Sections, SD1 and SD6 (The medieval and the modern period) . . . . .	22
12. Plan of tombs (The medieval and the modern period) . . . . .	23
13. Haji type pottery . . . . .	26
14. Rubbed copies of spatual marks on roof tiles . . . . .	27
15. Rubbed copies of coins . . . . .	28
16. Gorinto . . . . .	29
17. Yayoi type pottery . . . . .	29

#### Tables in Text

1. Tombs . . . . .	22
2. Nails . . . . .	27
3. Coins . . . . .	28

## SURVEYS ON A GROUP OF BURIAL MOUNDS AT TOKIWAHIGASHI-NO-CHO (KYOTO)

The survey area, exists at No.26-5, *Tokiwahigashi-no-cho Ukyoku*, Kyoto city, the ground belonging to INAE Fabrics Co., Ltd. The area in question is located in the western distance of 700 meters from *Narabigaoka* —a beauty spot, in the south-east of *Sagano*.

*Sagano* is famous for the massed burial mounds consisting of Key-hole shaped burial mounds and small circular ones. The area surveyed this time is surrounded by the Key-hole shaped burial mounds for example *Amazuka*, that of *Nakano-Sinno* and *Hebizuka* having a stone chamber on the fourth large scale in Japan so far as we know. There were few cases of remains of the Kofun Period found recently.

But this current survey enabled us to find three circular burial mounds. It is important in a double meaning that there are few cases of such a discovery in the plain as these, because most of the circular ones having the same scale known at *Sagano* are located on the hill, and we found them in area surrounded by the above-mentioned Key-hole shaped burial mounds of those who might be the leaders belonging to *Hata-uji* “秦氏”. *Hata-uji* was a lineage who had wielded a great power in ancient Kyoto, having indispensable influence on coming in existence of the Heian-Capital (A.D.794). These burial mounds excavated this time also are possible to interpret as remains concerning to them.

They were completely broken down as the upper construction of them. It is impossible to measure the height of mounds, stone chambers and etc. Therefore, we are able to know no more than the diameter limited by a surrounding ditch, and only a ground plan of the stone chamber in which the lower construction only remained.

### **The first one** (See PL-3 upper part of the left)

It has a diameter of 15 meters of which the stone chamber in *Yokoana*-type has a length of 8.4 meters and a width of 1.6 meters. *Sode* of the stone chamber (entrance of *Genshitsu*) being cut by a modern ditch, it's form is indistinct. There are a pavement in the stone chamber. It is a special construction that there are the stones horizontally arranged in two rows, like a coffin base in *Genshitsu*. The objects excavated make up a funerary hoard.

Two sets of a *Tsukibuta*-cap and a bowl, a long-footed bowl and two jars as *Sue*-type pottery (Stoneware), remained near by the main wall. And then two bowls, two caps, a jar of *Haji*-type pottery (Terracotta) and four iron arrowheads were found.

### **The second one** (See PL-5 upper part)

It has a diameter of 14 or 15 meters of which the stone chamber in *Yokoana*-type has a length of 8.4 meters and a width of 1.7 meters. Both entrance walls are almost strait. This stone chamber is paved with small stones. Relics were found in the stone chamber are as follows: 8 caps and 8 bowls, 2 long-footed bowls, 6 jars of *Sue*-type pottery. A bowl and a jar of *Haji*-type pottery, 3 iron arrowheads, 3 iron knives, 3 copper rings.

**The third one** (See PL-5, under-part)

It has a diameter of 18 meters and a stone chamber in *Yokoana*-type. The description is indistinct because it was almost destroyed except the lower part. It may be seen to have a stone-coffin. The excavated relics are as follows: 2 caps of one with a knob in the shape of spade, 2 bowls, a long-footed jar, as *Sue*-type pottery and 2 iron objects.

When we refer to the dating of *Sue*-type pottery in order to divide periods of these three burial mounds, it may be brought light to the under-mentioned fact. The second one is subdivisible into two periods because of a post burying. An older period of them is the earliest, continuing to the first one, the other period of the second one and the third one. But, it is said to be earlier what has a stone coffin in many cases at Sagano. That is to say, the third one is not always dated on posterior time in the first-half of the 7th century in accordance with the dating of *Sue*-type pottery. The dating of the third one, will be decided through here-after continuing the survey at *Sagano*.

From the second half of the 6th century until the first half of the 7th century, it was just before the daybreak of the Heian Capital. Then *Hata*-uji was steadily extending his power. The *Hachioka* temple, the predecessor of the *Koryuji*(temple) was constructed in 622 A.D. by *Kawakatsu-Hata* “秦 河勝”, the leader of “*Hata* lineage”. It was paralleling to about the end of the Kofun Period (Tumuli Period). For the purpose of the study on *Hata*-uji who constructed these burial mounds, and also on Kyoto of the Kofun period, the burial mounds found by the current survey tells us a great deal of the fact.